



NORDIC CULTURE REVIEW 2019

北欧語書籍翻訳者の会 活動レポート 2019

B

NORDIC CULTURE REVIEW

B面 北欧語書籍翻訳者の会 活動レポート2019

北欧文学サロン2019レポート 1-43

- ◆セミナーA スウェーデン・ミステリフェスティバル特別コラボ企画
- ◆セミナーB 映画・絵本に見る北欧社会と難民
- ◆セミナーC 北欧の性教育・フェミニズム
- ◆セミナーD 『あるノルウェーの大工の日記』公開読書会

北欧にまつわるエッセイ 44-63

- ◆字幕と外国の食べもの
- ◆フィンランドの夏の過ごし方
- ◆ある数学者のスウェーデン・ミステリーとの出会い
- ◆スウェーデンを代表する女性、グreta・トゥーンベリ
- ◆『リンドグレーンの戦争日記』副読本としての評伝ブックリスト

インタビュー 64-73

- ◆『三つ編み』担当編集者インタビュー

A面 北欧語書籍翻訳者の会 書評集 (※反対側からお読みください)

北欧語書籍翻訳者の会書評集・活動レポート2019

■発行年月日：2019年10月26日 ■発行者：北欧語書籍翻訳者の会

■執筆者：久山葉子、リセ・スコウ、セルボ貴子、種田麻矢、中村冬美、
服部久美子、羽根由、枇谷玲子、藤野玲充、ヘレンハルメ美穂、
よこのな

■問合せ：nordiclanguages2018@gmail.com

■ウェブ：<https://hokuougohonyakusya.wordpress.com/>
<https://note.mu/nordiclanguages/>

当冊子の発行はスウェーデン文化庁 Kulturrådet の助成と柳沢由実子さんのご寄付を受けて実現しました。



今年7月8日にスウェーデン大使館にて「北欧文学サロン2019」を開催いたしました。お越しいただいた皆様、ありがとうございました！

観客のみならずさまざまな角度から北欧の文学や文化に触れていただけるよう、4つの異なるセミナーをご用意しました。時間の都合上、AとBから一つ、CとDから一つを選ぶ形式でした。「全部のセミナーに参加しなかった」というご感想もいただきました。次のページから、それぞれのセミナーの登壇者が、当日の様子を画像取り交ぜ、詳しく報告していきます。参加された方もそうでない方も、お楽しみいただければ幸いです。

北欧文学サロン当日は、上記セミナーの合間に、ご来場いただいたお客様同士が親睦を深めていただけるよう「フィーカタイム」を設けました。デンマークのカフェバー Mikkeller 渋谷店のケーキ担当スタッフによる手作りルバーブケーキとレモンクッキーを提供いたしました。また、コーヒー用にマイカップ持参を呼びかけたところ、たくさんの方がお気に入りのカップを手にフィーカを楽しまれました。

【セミナー A】スウェーデン・ミステリフェスティバル特別コラボ企画

【セミナー B】映画・絵本に見る北欧社会と難民

【セミナー C】北欧の性教育・フェミニズム

【セミナー D】『あるノルウェーの大工の日記』公開読書会

【セミナー A】スウェーデン・ミステリフェスティバル特別コラボ企画

文◆久山葉子・服部久美子



セミナー A では、毎年 11 月にスウェーデン・スンツヴァルで開催され、今年で 7 年目を迎えるミステリフェスティバルの実行委員を務めるスウェーデン語翻訳者の久山葉子と、日本人で唯一フェスティバルに参加した、6ヶ国語でミステリを読むスーパー読者の服部久美子がフェスティバルの内容をレポートしました。

(久山) 今日お話しするのは、「スウェーデン・ミステリフェスティバル (Svenska Deckarfestivalen)」というイベントについてです。私が住んでいるスンツヴァル (Sundsvall) という町で毎年開かれているんですが、今年で 7 年目になります。毎年 11 月の一番暗くて天気の悪いときに、北欧全体から、ときにはイギリスやスコットランドなどから 10~15 名の作家さんをご招待し、3 日間のフェスティバルをやります。

私は最初は読者としてチケットを買って聞きにいらっていたのですが、3 日間ばっちり出席するオタクぶりに、「実行委員会に入りませんか」と声をかけられて、今では実行委員として活動しています。しかも、経理責任者という役割を押し付けられています。

(久山) こんな感じの会場で300人くらい入るところ。メディアも入って新聞に載ったりもします。



(久山) スウェーデン推理小説アカデミーが毎年、最優秀作品賞、最優秀翻訳作品賞、最優秀新人賞をノミネートするのですが、フェスティバル内で、アカデミーがノミネートした各賞5作品を、アカデミー会員のシャシュティン・ベリマンさんが発表します。その中から約1か月後に、最優秀作品が選ばれます。



(久山) 実行委員としての一番の楽しみは、もちろんセミナー自体も楽しみなんですけど、イベントのあとの作家さんたちのお食事会です。終わるのが夜10時頃でみんなへとへとでおなかが空いたタイミングでご飯を食べる、私はそれが何より楽しみです。目当ての作家さんの隣にちゃっかり座った



りして。作家さんたちは気さくで友達のように話しかけてくれて、作品の内容は怖いのに本人はフレンドリーでチャーミングな方だったりという意外な発見があります。

(久山) 2016年に久美子さんがはるばるスウェーデンまでフェスティバルに来てくれました。その時の様子をレポートしていただきます。

(服部) 私はちょうどこの年、大学のサバティカルに当たっていて、普段より仕事が軽いので、この機会を逃したら定年後までフェスティバルに参加する機会はないかなと思ひ決心しました。このようなフェスティバルに参加するのも、作家さんたち本人に会うのも初めてでした。

これは、久山さんたちがシャーロックのコスプレでチラシを配っている写真です。

(久山) 実行委員会のメンバーに、劇団に勤めているおばさまがいて、劇団の衣装部屋に入らせてもらい、「好きな衣装着ていいよ」と言われました。私は「金持ちの夫を殺した未亡人風」と皆から笑われ、おばさまは頭に斧がささってますよね…。あと、シャーロック風のおじさまもいますね。



(服部) この写真は会場の前の方。
おどろおどろしいでしょう？

参加者は比較的、年齢層が高いですね。その中に10代の若い人たちが混じっていて、あとから久山さんが教えている高校の生徒さんたちが文学の授業で来ていたと聞きました。



ミステリが文学として認められているのに驚きました。

スウェーデンではミステリの地位が高いのですよね？

(久山) 確かに高いですね。

(服部) この右の方は作家の
カタリーナ・ヴェンスタム
(Katarina Wennstam)さん。
この方も含めて何人か、フェミ
ニストの作家さんがいて、家庭
内の女性の問題から、人身売
買(バルト諸国から若い女性
が騙されて売春をさせられる)
にいたる様々な問題を書いています。元ジャーナリストで、多くの人に読んでもらうた
めにミステリ小説として書いたという人もいました。



(久山) 確かにそういう形でジャーナリストからミステリ作家になる人は多いですね。
学校の授業としてミステリフェスティバルに来ている生徒たちも、こういうセミナーだ
とただ本が面白いだけでなく、社会問題を考えていけるので、学校側からも好まれて
いるフェスティバルです。



(服部) この人はオリビエ・トゥルック
(Olivier Truc)さん。スウェー
デンに住むフランス人で、ノルウェ
ー北極圏のラップランドが舞台のミ
ステリを書いています。トナカイ飼育
がおこなわれている地域には、飼育
者同士の争いを解決する「トナカイ
警察」というものがあります。彼のシ
リーズは、トナカイ警官の2人が中心人物です。ミステリですから殺人が起こるわけ
ですが、普段はトナカイの問題を扱っている2人も借り出されます。オリビエさんは今
もジャーナリストを続けていて、小説も書いてます。

(久山) 彼はスウェーデン人と結婚しているからストックホルムに住んでいるんです。フランスのテレビ局のためにトナカイ警察のドキュメンタリーを作ったとき、自分でもすごく興味深いと思ったので、小説にしたそう。フランスで評価されて、多数の賞を取っています。その後、いろいろな国の言葉に翻訳されています。私と久美子さんはすっかり彼のファンになってしまいました。

(服部) オリビエさんには買った本にサインお願いしたくらいで、それ以上話す勇気がなかったんですが、次の日にホテルの朝食会場で目が合ったら、わたしのテーブルに来てくれました。「なぜ、ラップランド？」と聞くと、あまり人の知らないところに行きたいとのこと。この機会に本に出てきた「*siida*」という言葉の意味を尋ねたのですが、いくつかの家族が集まってトナカイ飼育の単位となっているものだそうです。その単位ごとに、季節によってトナカイを連れて移動していくテリトリーが割り当てられている。スウェーデンのテリトリー図をスマホで見せながら説明してくれました。作家さんは読者を大切にしてくれますね。あと、フェスティバルの講演でも話が上手です。

(久山) 確かに、話が上手い方多いですね！

(服部) この写真は久山さんが最近訳した『悪意』（東京創元社）の著者ホーカン・ネッセル（Håkan Nesser）さんです。



(久山) ネッセルは、スウェーデンでは知らない人はいない巨匠です。エンターテイメント要素だけでなく、文学的な要素のある作品を書いています。「私はミステリは読まないのよ」というおばさま方も、「ネッセルなら読みますけどね」という存在なんです。

(服部) そういえば、エレベーターで一緒になったら、ぬぬぬっと背の高い人でした。

(久山) そう、ハリウッド俳優のようなカッコいいおじさまで、しかもいい方で、フェスティバルのあとのお食事のときに「私、翻訳者なんですけど」と言ったら、「日本は、大昔に1冊翻訳(『終止符(ピリオド)』講談社文庫)が出たけれど、そろそろまた日本でも出てほしいなあ」とおっしゃり、すぐにエージェントに連絡してくれて、「映画化される『悪意』を、よかったらヨウコに訳してもらってください」という連絡が日本の出版社にきました。彼はほんとに大物なんですよ。それなのにパーソナルなつながりを大切にしてくれるところに感激しました。

(服部) 中央の方はトーヴェ・アルステルダール (Tove Alsterdal) さん。やはり久山さんの翻訳で邦訳が出ています。



(久山) 彼女は元ジャーナリストで、スペインとアフリカの間の海峡を難民がこっそり渡ってきて、溺れて大勢亡くなる様子取材して、それをベースに『海岸の女たち』(創元推理文庫)を書きました。

(服部) ところで、左に写っているのが、フェスティバルのモデレーターのシャシュティンさん、ルンド大学の先生なんですね。ミステリ文学が専門だそうです。

(服部) 次の写真はヴィヴェカ・ステン (Viveca Sten) さん(右)と娘のカミッラ・ステン (Camilla Sten) さん(左)です。親子で共著を出しました。



(久山) お母さんのヴィヴェカは有名作家で、日本でも何冊か翻訳が出ています(『静かな水のなか』『煌めく氷のなかで』『夏の陽射しのなかで』ハヤカワ・ミステリ文庫)。カミッラのほうは大作家の娘なわけですが、自身も実力派で、お母さんとは違ったジャンルの SF やホラーを執筆、若いのに将来を嘱望されています。

(服部) なお、この写真は、イベントの休み時間に撮ったものです。会場で本を買って、サインしてもらえます。作家さんの周りに大勢が群がるのではなく、適度に空いているのがいい感じでした。



(服部) こちらはスツヴァルで活躍している本物の刑事さん。かっこいい女性刑事 2 人で、実際の殺人事件捜査の話をしてくださいました。その事件は、男性が失踪して、ガールフレンドが心配して警察に通報したところから始まります。容疑者が 3 人に絞られて、携帯の情報、電話の

盗聴などが行われたそう。そんなことできるの? と驚いたのですが、パソコンの内容も調べていました。殺害方法がある映画の処刑シーンと似ていたんです。映画で処刑の前に唱えるラテン語が容疑者のパソコンのメールに見つかったのが決定打だったそうです。解決するまでに 2 年 8 か月。解決後に山のように書類を書かなければならなかったと言っていました、いづこも同じですね。

(服部) これは大学とコラボした講演です。大学の学生さんがたくさん聴きに来ていました。



(久山) 大学でミステリの表紙の研究・分析をしているカール・ベリルンド (Karl Berglund) さんが講演しました。もう一人の方は、1年で100冊くらいの本の表紙を手掛けている超売れっ子の表紙デザイナーさん (Niklas Lindblad) です。100冊ってすごいですよね。スウェーデンで出る本の半分くらいじゃないの？(笑)

彼がブレイクするきっかけとなったのは、モンズ・カッレントフト (Mons Kallentoft) のシリーズの表紙で、一作目(『冬の生贄』創元推理文庫)は裸の男の死体が木から吊るされるんですが、その足だけが表紙に描かれていました。2冊目(『天使の死んだ夏』創元推理文庫)は血がついた手。背景はきれいな雪景色やお花畑。どれも可愛いパステルカラーと恐ろしさの対比が目立って、とても人気が出ました。カッレントフトは私が初めて翻訳したミステリ作品なんです。移住したばかりの頃、娘を連れて入った本屋で一番目を引いた表紙で。面白そうだと思って調べて日本に売り込んだんですが、あの表紙がなかったら、私はミステリの翻訳者にはなれていなかったかも？ 表紙の足は表紙デザイナーさん本人のもので、写真家である奥さんが撮影したものだそうです。



(服部) この写真(左)に写っているのは、ノルウェーのヨルン・リーエル・ホルスト (Jørn Lier Horst) さん。日本では『獵犬』(ハヤカワ・ポケット・ミステリ)が出ています。気さくなおじさまでした。

(服部) 私はミステリガイドツアーにも参加しました。スツツヴァルを舞台にしたシリーズがあって、小説に出てくる重要な場所を巡ってそこで朗読するんですね。最後に訪れたのは、主人公がよく行くパブ。当然入って一杯飲んできました。

(久山) スウェーデンは地方都市を舞台にした作品が多くありますね。例えばこのシリーズはスツツヴァルが舞台なので、いつも図書館で貸し出し数ベスト1。

(服部) この新聞記事は、日本からわざわざミステリ・フェスティバルに来る人がいるということで、スツツヴァルの地方新聞(Sundsvalls tidning)に取材されたんです。

(2016年11月9日付、
文化面掲載)



(久山) 久美子さんがいらしたのは2016年でしたが、私はその前後もフェスティバルに参加して、多数の作家さんにお会いしました。

この方はアンナ・ヤンソン(Anna Jansson)さんという元気なおばちゃんで、ゴットランド島を舞台にした小説(『消えた少年』『死を歌う孤島』創元推理文庫)を書いています。ゴットランド島は世界遺産にもなっていて、魔女の宅急便のロケハンが行われた中世の面影の残る町です。夏は観光客に大人気。



(久山) 第1回のフェスティバルには観客として行ったんですが、マイ・シューヴァル (Maj Sjöwall) がゲストの目玉でした。失礼ながら、まだ生きていらしたのか、と驚きました。『刑事マルティン・ベック』シリーズを書いたシューヴァル&ヴァールー (Sjöwall&Wahlöö) のシューヴァルです。

フェスティバルのサイン会
のとき、私は当時ヴィヴェカ・ステンの第1作目のリーディングをしたばかりだったので、話しかけに行っただけですね。すると隣にマイ・シューヴァルさんが



いらして、ヴィヴェカさんが気を使ったのか、彼女のことも会話に引き入れたんです。「あなたの作品はもちろん日本語に翻訳されてるわよね？」って。すると、マイおばちゃんは「でもね、あたしの作品は英語から訳されてんのよ」と怒り出しました。でも、すぐそのあとに柳沢由実子さんがスウェーデン語から直接訳すことになったので、きっと喜んでいると思います(『笑う警官』『ロセアンナ』『煙に消えた男』『バルコニーの男』『消えた消防車』角川文庫)。

(久山) なおヴィヴェカ・ステンさんは企業の重役を務めるビジネスウーマンでしたが、今はすっかり有名ミステリ作家に。その前には、1冊だけビジネス書も書いたことがあったそうです。





(久山) このオーサ・ラーソン (Asa Larsson) さんは、北極圏を舞台にして爆発的に売れたシリーズ (『オーロラの向こう側』『赤い夏の日』『黒い氷』ハヤカワ・ミステリ文庫) の作家です。

第2回のフェスティバルにいらして、私は観客としてたまたま隣に座りました。一生懸命ノートにメモを取っていたら、「あなたジャーナリストか何かなの？」と話しかけてくれて、「翻訳してるんです」と言うと、「あなたたちみたいな人が紹介くれるから、わたしたちが世界に出ていけるの。本当にありがとう」と言ってくれました。大御所に話しかけられただけでも感激なのに、そんなこと言ってもらえるなんて嬉しいですね。

(久山) こちらは言わずと知れた、『3秒間の死角』(角川文庫)の著者アンデシュ・ルースルド (Anders Roslund) とベリエ・ヘルストレム (Börge Hellström) の2人組。



アンデシュさんは、有名なニュース番組のディレクターを務めていた方で、社会派のジャーナリストです。もう一人のベリエさんは元犯罪者で、犯罪者の社会復帰の活動に携わる中で、アンデシュさんと知り合い、一緒に本を書くことになったそう。残念ながらベリエさんは数年前に病気で亡くなりました。私はたまたま亡くなるほんの数か月前に講演を聞いたばかりだったんです。ぎりぎりまで病と闘いながら自分の想いをみんなに伝えていたんだなと気づきました。

(久山) ラーシュ・ケプレル (Lars Kepler) 夫妻。



覆面作家としてデビューして話題になりました。二人とも、もともと純文学を書いていた作家で、写真でも分かる通り妖精のように美しいカップル。一気に人気作家に。(『催眠』『契約』『交霊』ハヤカワ・ミステリ文庫)

(久山) エメリー・シェップ (Emelie Schupp)さんは集英社から翻訳が1冊出ています(『Ker 死神の刻印』集英社文庫)。ヴィジュアル映えもする方でアピールも上手。



えらいと思ったのは、最初出版社に持ち込んでもなかなか返事がなくて、「だけどこれは絶対面白いはず」と自費出版し、四万部を売り切った。そのあとに出版社と契約して改めて作品が世に出たと

いう伝説的な方です。フェスティバル中、私が教えている高校にも講演に来てもらったんですが、1泊なのに特大のスーツケースで登場。中身は半分が自分の本でした。すでに超有名作家なのに、自分で売ろうとして持ってきたんですね。

同時にホテルにチェックインしたケブレル夫妻は妖精のように軽やかで、ほんの小さなスーツケースでした。それを見て、エメリー・シェップは「見て、この違い。わたしったらほんとに泥臭い」と笑っていました。うちの学校に来たときも、まずスーツケース開けて本を並べて、「よかったら買ってください」と。尊敬するくらい商売熱心。有名になった今でもなんです。その心意気は見習いたい。

(久山) 最後に、今年の六月のスウェーデンのナショナルデーのお祭りで、街頭に立って今年のフェスティバルの宣伝をしたときの写真です。



毎年作家さんの名前を入れたしおりを作って、配っています。



スウェーデン・ミステリフェスティバル Svenska Deckarfestivalen

公式サイト (スウェーデン語)

<http://www.svenskadeckarfestivalen.se/>

【セミナー B】映画・絵本に見る北欧社会と難民

文◆藤野玲充・種田麻矢



セミナーBでは、英日の映像翻訳を専門にしている藤野玲充と、デンマーク語の書籍翻訳を専門にしている種田麻矢が、北欧の社会と難民を描いた映画と絵本を中心にご紹介しました。

短編映画『レフュジー 532』と北欧の難民政策

まず始めに、藤野が字幕翻訳を担当したスウェーデンの短編映画『レフュジー 532』(Flykting 532)の冒頭部分を観客の皆さんにご覧いただきました。

この映画はボスニア紛争によって、故郷からスウェーデンに避難してきた難民の男の子が主人公です。ボスニア紛争は、ボスニア・ヘルツェゴビナで1992年～1995年にかけて起きた内戦で、旧ユーゴスラヴィア連邦からの独立を巡って、ボシュニャク人(ムスリム)、クロアチア人(カトリック)、セルビア人(東方正教会)の3つの民族(宗教)が衝突しました。この作品は、その紛争の真っ最中である1993年の出来事を描いています。



ボスニアからスウェーデンへの難民申請数は1992年から2003年の12年間の合計で5万人を超えています(※)。この作品を手掛けたゴラン・カペタノビッチ (Goran Kapetanovic) 監督も、17歳の時にボスニアからスウェーデンに逃れてやってきたそうです。

※『スウェーデンにおける第三国定住プログラムによって受け入れられた難民及び庇護(難民認定)申請者等に対する支援状況調査報告』(2005年2月) (財)アジア福祉教育財団 難民事業本部
<http://www.rhq.gr.jp/japanese/hotnews/data/pdf/55.pdf>

次に『レフュジー 532』の字幕翻訳や、デンマークでの難民政策について対談形式でお話しました。

(種田) この映画を観る前に藤野さんから、難民をテーマに扱った映画だということを知ったとき、私がぼんやり想像していたのは凄まじい戦争や過酷なシーンだったことに気がつきました。

実際に映画を見て、そのような想像していた絵が一気に吹き飛んだのは、おそらくこの映画が焦点を当てて映し出しているのが、お腹が空いた子どもたちが故郷のご飯の話をしたり、からかってふざけたりするごく普通の子もたちだったからだと思います。そういう、どこにでもいる子どもらしい子どもたちの会話や表情と、紛争から逃れてきた事実が重なり、やりきれない気持ちになりました。

ボスニアに限ったことではないですが、避難を余儀なくされている世界の人々や子どもたちについて日本であまり話題にならないのは、普段から難民の人たちと関わりあう機会が限られていることや、宗教や民族間の複雑な関係を学校で学ぶ機会の少なさが原因のひとつでもあるのかなとも思います。この映画は、ボスニアから遠く離れた日本の観客に、ずっと目を向けさせる機会を与えてくれるのではないかと思います。



(種田) 映画の中のセリフで、特に訳が難しかった箇所はどこでしたか？

(藤野) 特に悩んだのは「農場の子さ」“He grew up with ducks and geese in some ditch in Bosnia.”というセリフでしょうか。1秒ちょっとしかないので、字幕は6文字しか入れられません。中盤から後半にかけて、ガチョウを手なずけたりさばいたりするシーンが出てくるので、どうしてもその部分とのつながりがほしかったのですが、字数が限られていてかなり難しかったです。

(※参照:藤野玲充「字幕と外国の食べもの」B面44~47ページ)

(藤野) 難民問題について、現地に住んでいる種田さんから見た現状を教えてくださいたらと思うのですが、デンマークでの対応・取り組みや市民の関心・反応などはどうでしょうか？

(種田) デンマークは、国連の難民支援機関 (UNHCR) との協定に基づき、1979 年以降難民の定住を受け入れるようになりました。1989 から年に 500 人の難民受け入れ数を設けていたのですが、2015 年以降は停止しています。

2018 年、デンマークは 3465 人の難民申請を受け、もっとも申請者の多かった国はエリトリア、シリア、ジョージア。2015 年は、いわゆる「難民危機」と呼ばれる年で、申請者が2万人を超えましたが、翌年の 2016 年は急激に減っています(※)。スウェーデンが国境検問を一時的に導入したことによって、通過地点とされていたデンマークにも影響したのではないかとされています。

※ Information on refugees in Denmark <http://refugees.dk>

移民統合省ウェブサイト <https://uim.dk>

(種田) 現在デンマークも難民政策が厳しくなっている状況で、その例のひとつに、昨年末に日本のメディアでも「島流し」と呼ばれていた政策があります。これは難民をリンドホルム Lindholm という島に隔離して住ませる計画でした。幸いにも、2019 年 6 月の総選挙で政権が変わり、この計画はなくなりましたが、まだ解決策は生まれていない状態ですし、新しい政権になっても難民政策の厳しさはあまり変わ

らないと思われます。

あと、デンマークには“Udrejsecenter”（「出国センター」の意）と呼ばれる、難民認定が却下され、自国に帰還するまでの滞在を目的として使用されている施設がありますが、そこで暮らす当事者の方々は実際は自国にも帰れず、デンマークからも拒否され、行き場を失った人々や家族です。そこでは例えば、部屋に電子レンジや冷蔵庫を設置してはならず、自分たちで料理をしてはいけないという規則があります。

このような酷い環境の施設の閉鎖を訴えるために、内閣府前やコペンハーゲンの中心地で施設の住民やボランティア団体が協力してデモを行ったりしていました。

施設での生活がストレスとなって苦しむ子どもたちを考慮し、子もちの家族を別の施設に移す計画がいま進められています。

難民問題を知るために

次は、難民に関する北欧映画、そして絵本を2冊、そしてヤングアダルト小説とグラフィックノベルを1冊ずつ紹介させていただきました。



【映画紹介】

4本の映画をご紹介しましたが、どの作品も難民の人々の生活や異国で暮らすことの困難、彼らの受ける差別などの問題が多様な角度から描かれていると思います。

①『希望のかなた』 (Toivon tuolla puolen) 2017年



2017年12月に公開されたフィンランド映画で、アキ・カウリスマキ監督の作品。内戦が激化するシリアから逃れ、フィンランドにたどりついた青年カーリドが、生き別れになった妹を探す物語。

監督： Aki Kaurismäki

②『ナイス・ピープル』 (Trevligt folk) 2015年

スウェーデンのダーラナ地方にある町ボーレンゲ (Borlänge) で暮らすソマリア難民の若者たちが「バンディ」というスポーツ、氷の上で行うアイスホッケーのような競技の世界



選手権に挑戦する様子を追ったドキュメンタリー。チームを立ち上げたのは地元の事業家。熱帯地域からやってきた彼らは、スケートで滑るところから練習を始める。

監督： Anders Helgeson & Karin af Klintberg

③『国王への手紙』 (Brev til Kongen) 2014 年

ノルウェーの難民キャンプで暮らす5人が、それぞれの目的や事情を抱えて、同じバスで首都オスロへ向かい、そこで思い思いの1日を過ごす。5人のストーリーが同時並行で描かれているが、メインはタイトルの通り、「国王へ手紙を渡したい」という83歳のおじいさん。この映画を手掛けたのは、クルディスタン生まれ、ノルウェーで活躍するヒシャーム・ザマーン監督。



監督： Hisham Zaman

④『未来を生きる君たちへ』 (Hævnen) 2010 年



デンマークのスサンネ・ビア監督が手掛けた作品で、日本では2011年夏に公開された。デンマークに住んでいる難民の話ではなく、アフリカの難民キャンプで医師として働くデンマーク人の父親がでてくる。「北欧に暮らす難民」というテーマからは少し外れるが、いじめや離婚など、北欧社会、学校や家族が抱える問題が丁寧に描かれた作品である。

監督： Sussane Bier

【絵本紹介】

①絵本『バスに乗って』



原題：Åka buss

作者：Henrik Wallnäs 作・Matilda Ruta 絵

出版年：2016年

スウェーデン語

対象年齢：3～6歳

※未翻訳

お母さん猫と子猫がバスに乗って長い旅にでて、知らない国に向かうお話だが、難民の親子を描写している絵本。戦争を連想させる言葉が一切でてこない。しかし、絵の中には武器を構えた兵隊、戦闘機、爆弾の煙、炎、赤く照らされた空などが描かれており、色味も暗い。冒頭で祖母と別れる理由も、なぜ遠い旅にでるのか説明もない。しかし、悲しい旅であることは真っ直ぐ伝わってくる。

幼児向けということもあるだろうが、あえて説明を省いたような簡潔な文章に仕立ててあるのは、親子で対話するきっかけを与えるための作者による意図だろうか。私が子どもだったら、きっと親に質問攻めするだろう。なぜ猫の親子は遠い旅にでるの？ どうして家の窓や屋根が壊れてしまったの？ なぜおばあちゃんやお父さん猫は一緒に来ないの？ なぜ子猫は泣いているの？ なぜ寒そうな鉄のパイプのベッドで寝なくてはいけないの？

子どもだけでなく、読みきかせる側である親にも問いかける絵本だ。難民問題が常に議論されている国ならではの作品だと言える。





②絵本『空をとぶ紙ひこうき』

原題： Flyvere på himlen

作者： Annette Helzog 作・ Katrine Clante 絵

出版年：2008年

デンマーク語

対象年齢：6～10歳

※未翻訳

リディアという女の子が語り手。自分の生まれた国で過ごした日々、そこで体験した戦争の恐怖と友達の死、そして最後に、いま暮らしている新しい国での生活といったように、主人公の人生を3つに区切って綴っている。

先ほど紹介した猫の親子の本とは異なり、ここでは飛行機や武器といった単語がでてくる。「空から大きな石が降ってきた」という表現がでてくるが、爆弾を意味しているのだろう。

戦争の恐ろしさや友達を失った悲しみ、自分の国とは全然ちがう場所での新しい生活、また、ここでは記述していないが、「戦争が起きてから笑いも泣きもしなくなった」兄の描写もある。知らない国での友達づくりの難しさや苦しさが、主人公をとおして伝わってくる。難民の子どもたちの心情に寄り添った物語。デンマークブックデザイン賞にノミネートされた作品。

③グラフィックノベル『ZENOBIA (ゼノビア)』

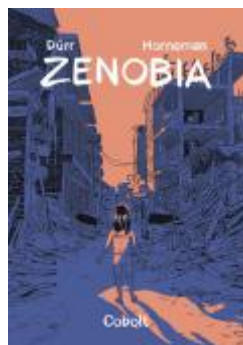
原題：ZENOBIA

作者：モーテン・デュアー作・ラース・ホーネマン絵

出版年：2016年

デンマーク語

※日本語版：サウザンブックス、2019年



シリアの小さな村で、ごく普通に家族と暮らしていた少女アミナ。シリア内戦の悪化により、両親を亡くし、ボートで避難するものの、転覆してしまう。海に沈みながら、昔を思い返すアミナ。

④ヤングアダルト小説『ひと差し指の先っぽ』（2016年、デンマーク）

原題：For enden af din pegefinger

作者：Kristina Aamand

出版年：2016年

デンマーク語

※未翻訳



ギムナジウムに通う17歳のムスリムの女の子シエヘラザード。7歳のとき、両親とデンマークに移住。ある日デンマーク人の女の子に恋をする。

同性愛、文化の衝突、平行社会、イスラム社会における抑圧や干渉を主人公の目線で描いている。

(※参照：種田麻矢「マイノリティの中のマイノリティ」A面6～9ページ)

映像翻訳 Q&A

最後に、映像翻訳に関する質問を種田から藤野に質問する形式で進めました。イベント当日は時間が足りず、本来準備していた質問すべてにお答えできませんでしたので、この場で全質問と回答を掲載いたします。

①重訳について

(種田)『レフュジー 532』の字幕翻訳についてです。ボスニアの男性また子どもたちのセリフはボスニア語から直接ではなく、英語からの重訳かと思うのですが、映像

翻訳では重訳は普通なのでしょうか？ 英語圏以外の言語で製作された映画の場合、その使用言語から直接訳す場合もありますか？

(藤野) 映像翻訳では、今までの私の経験からの推測にはなりますが、重訳は一般的なようです。私も英語スクリプトをもとにして、さまざまな言語の作品を翻訳してきました。

もちろん元の言語から直接訳す場合もあると思いますが(フランス語や中国語など話者・学習者が多い言語であれば翻訳者も見つかりやすい?)、特に動画配信などでは短時間でボリュームのある作品を訳すこともあり、対象言語の翻訳者を探すのが難しいのでは。あと、今回のようにさまざまな言語が混じる作品も多いですよ。

北欧の映画で松浦美奈さんやアンゼたかしさんが日本語字幕を担当されていることがあります。たぶん北欧の言語は分からないはず…。場合によっては監修がついているかもしれないですね。

②女性言葉について

(種田) 映画字幕で、いわゆる「女性言葉」は今も使われていますか？

(藤野) 昔に比べると、全体的にだいぶ減っていると聞いています。

個人的には、「わ」と「よ」は多くならないように気をつけてます。

「ね」と「の」はわりと自然じゃないでしょうか。日本語のインタビューなどを読みだりして、表現や言い回しを勉強していますが、女性言葉を全部排除するのは難しいなと感じます。普通に話しているような感じで文字にすると、すごくぶっきらぼうに見えてしまうんですよ。話し言葉なら自然なのに……。

あと、字幕では句読点を使用しないので、文の終わりをきちんと示さないと、次の字幕とつながって見えてしまうというのも、理由のひとつかもしれません。また、同じ語尾が続くと単調に見えるので、それを避ける狙いもあるかと思います。

③字幕と吹き替えについて

(種田) 日本では過去に、例えば日曜洋画劇場のようなテレビ番組で海外(主にハ

リウッド)の映画がテレビで放送されていて、基本吹き替えてしたよね。字幕を読むのが面倒だという声も時々見かけますし、日本人は字幕慣れしていないようなイメージがあるのですが、どう思われますか？ いまではおそらく字幕/吹き替えを選択できるようになってきているかと思いますが、どちらが人気なのでしょう？

(藤野) テレビに関して言えば、吹き替えが基本で、字幕での放送は少ないですね。でも、映画が好きなのは字幕派が多いのかなと思っていました。ちなみに北欧だと、普通にテレビで英語圏のものが英語音声+字幕が流れているというイメージで合ってますか？ 逆に英語圏などでは映画は吹き替えが多いと聞いたこともある気がしますが、どうでしょう？

(種田) デンマークでは、子ども向けのテレビ番組や映画は吹き替えですが、それ以外はだいたい字幕ですね。ドイツやスペインは吹き替えが多いって聞きますよね。

(藤野) 日本のテレビで吹き替えが多いのは、日本語の場合、漢字があるので子どもが読めないという理由も大きいのではないのでしょうか。

それに、今は映画でも吹き替え派が増えているみたいですね。理由としては、映像やストーリーに集中できる(字幕は文字を追うのが大変)とか、好きな声優さんが吹き替えをしているとか、いくつか挙げられると思います。

また、DVDや配信など、字幕と吹き替えの両方を楽しんで頂ける機会が増えましたよね。字幕と吹き替えの比較が容易にできるようになったため、できるだけ訳をすり合わせるケースが増えていると聞きました。

④ 持ち込みについて

(種田) 文学翻訳では翻訳者が出版社に持ち込んで提案すると思うのですが、字幕翻訳の場合はどうですか？ もし自分が訳したいと思う映画があった場合の手段は？

(藤野) これは「北欧語書籍翻訳者の会」に参加させて頂いて、みなさんの活動を見てすごく違いを感じた部分ですね。書籍翻訳の世界では、翻訳者が未邦訳の作

品をチェックしていて、自分が面白いと思ったものを日本で紹介したいという熱意が根底にあって、作品に向き合ってるんですね。

映像翻訳の場合は、制作・配給会社（クライアント）→翻訳会社（エージェント）→翻訳者という流れが一般的なのではないかと思います。自分が訳したいと思う映画があって……という話だと、私が見ている限りでは「自ら配給会社を立ち上げた」という例しかなくて、制作会社や配給会社に持ち込んだという話は聞いたことがないです。あとは、映画祭やイベント上映のような形でやって、そこから人気が出れば一般公開に……ということはあるかもしれません。

⑤映像翻訳の魅力

（種田）最後に、映像翻訳の魅力について教えてください。何が一番難しく、何が一番楽しいですか？

（藤野）単純に、面白い作品に出会えるとうれしいですね。言葉について考えるのが好きだし、調べ物もけっこう好きだし…というのが大前提にあるかなと思います。

映画などを観ていて良い字幕がついていると、画面と一体になってびたっとはまっている感じがするのですが、自分で納得がいくまで悩んで、最終的にそういう字幕ができた時には喜びを感じます。

難しいというか、つらいな……と思ったのは、あるドキュメンタリーでヘイト発言を訳さなければいけなかった時。その発言の意味・意図を理解して日本語にするという作業に苦労しましたし、自分でその言葉を発したような嫌な感覚も残りました。

また、幅広いジャンルの案件に対応しなければいけないことも、難しい点のひとつかもしれません。基本的に納期が短いので、いかに効率的に調べ物をして、その分野にふさわしい言葉選びができるかが勝負だなと思います。でも、ありとあらゆるジャンルの案件があるというのは、裏を返せばどんな知識や趣味でも生かせるフィールドがあるということなので、魅力でもありますね。

【セミナー C】 北欧の性教育・フェミニズム

文◆ 枇谷玲子

昨年、NHK あさイチの性教育特集が話題になるなど、性教育のあり方について、議論が高まっています。また #MeToo 運動をきっかけに、フェミニズムに関する議論も活発に行われてきています。このような流れを受け、出版の世界でも性教育やフェミニズムの本の出版が増えてきています。

セミナー C は、『北欧に学ぶ小さなフェミニストの本』（サッサ・ブーレグレン作、岩崎書店）や『ウーマン・イン・バトル』（マルタ・ブレン作、イエニー・ヨルダル絵、合同出版）を翻訳し、現在は性教育に関する児童書『北欧に学ぶ 好きな人ができたら、どうする？』（※2019年8月に晶文社より刊行）や『セックスとは何だろう？』（“*Hvad er sex?*”）を翻訳中の翻訳者の枇谷玲子と、それらの本や『世界の半分、女子アクティビストになる』（ケイリン・リッチ著）などを編集している晶文社の松井智さん、スウェーデンの性教育、フェミニズムのコミック『禁断の果実 女性の身体と性のタブー』（リーヴ・ストロームクヴィスト作）を編集した花伝社の山口侑紀さんが登壇しました。

当日は3人がまず自己紹介を行いました。



枇谷玲子



晶文社 松井智さん



花伝社 山口侑紀さん

聴きにいらしてくださった皆さんの参加動機

その後、聞きにいらしてくださった皆さんが「なぜ性教育・フェミニズムというトピックに関心があるのか？」を発表していただきました。性教育に取り組んでいて、これからスウェーデンに視察に行くという産婦人科医の方や、児童書編集者、塾の先生、図書館司書の方、フェミニズムについて学ぶ大学生の方、『教科書にみる世界の性教育』（かもがわ出版）の編集者さんをはじめ、たくさんの方が活発に発言してください、このトピックへの関心の高さがうかがい知れました。

日本の性教育の歴史

次に翻訳者の枇谷から、『教科書にみる世界の性教育』の中に書かれていた日本の性教育の歴史についてご紹介しました

途中、日本の性教育に大きな役割を果たしているアーニ出版の絵本も紹介しました。『あかちゃんはこうしてできる』（ベル・ホルム・クヌーセン作、北沢杏子訳、品切）は23刷以上のヒットとなったようです。翻訳をした北沢杏子さんは全国の幼稚園、保育所、小、中、高校、大学などの要請で性教育の出張授業も行っていたようで、この絵本をもとにスライドをつくったり、ビデオ教材をつくったりして、実際にこの絵本を授業で用いてきたようです。彼女はこれだけでなく様々な性教育のスライド、ビデオを作成し、文部省特選、文部大臣賞、教育映画祭最優秀賞などにも選ばれていて、日本の性教育の発展に大きく寄与した方々です。



性教育元年と呼ばれる1992年前後に各地の教育院会が手引きや指導書を作成し、教育現場では盛んに性教育の研究授業がおこなわれ、まさに性教育ブームと呼ばれる活況になったこと、そしてこの頃性的自立、性的権利（セクシャルライツ）が目目されるようにあり、子どもには性的権利のひとつとして性教育を受ける権利があり、子どもを性的自立へ導くことが性教育の主な目的のひとつであると考えられるようになったことが『教科書にみる世界の性教育』では描かれていました。

1991年に日本で『イーダとペールとミニムンあかちゃんがやってくる!』（グレーテ・ファーゲルストローム作、グニッラ・ハンソン作・絵、きたざわきようこ、はまこ・ペーション訳、アーニ出版）という本が出版されています。この本の作者はデンマークで生まれ、スウェーデンで教育を受けました。画家はスウェーデン人です。スウェーデンで1977年に初版が出された本です。私はこの本をデンマークの教材センターで勧められました。

訳者の北沢さんはこの絵本を日本では早すぎると思いずっと温めてきて、1992年の4月に小学校の生活科、理科、保健の教科書に性教育が登場することになったことで出版に踏み切った、とあとがきに書いてあります。この本でも性交というものが包み隠さず描かれています。

同書117ページでは、パパとママがだきあったり、キスしたりすると、しぜんといっしょになりたいってきもちになって、パパのペニスが大きくかたくなり、ママのワギナもぬれてきて、パパのペニスがママのワギナに入ると説明されています。

しかし2002年前後から国会や議会を舞台に性教育バッシングが起き、教育現場に政府が直接介入し、具体的な影響を与えはじめます。政府は2004年『性教育の手引き』を改定し、小学校1～3年生ではペニス、ワギナという名称を教えることは不適切、小、中、高いずれの学習指導要領にも性交は示されておらず、中学校の保健の学習指導要領ではコンドームの装着の仕方を取り扱わないことが強調されました。

また中学校の学習指導要領では避妊について何も示めされておらず、コンドームの使用についての情報も保健体育の教科書に書かれていないことがほとんどのようです。

小学校5年理科の大日本図書『たのしい理科』（2011年）では、精子がなぜ／どのようにして女性の体内の卵子と結びついたかについては触れられていない、と『教

科書にみる世界の性教育』では紹介されていました。

北欧の性教育の本

これらの日本の教科書の問題点を踏まえ、いくつかデンマークを中心に北欧の性教育の本をご紹介します。

『女たちよ自分の体を知れ』は、もともとは1969年の春ボストンで開かれた女性会議の分科会のひとつ「私たちとそのからだ」という討論グループをもとに編まれ、1973年に英語初版が出された”*Our bodies, ourselves*”を翻訳し、デンマーク向けに加筆したものです。デンマークでは大ベストセラーとなりました。



日本版は、『からだ・私たち自身』（ボストン「女の健康の本」集団著、『からだ・私たち自身』日本語版翻訳グループ訳、松香堂書店）というタイトルで1988年に出されました。

デンマーク語版では、性器の形は人によって違うというのを示すために、たくさんの女性たちの性器の写真が映し出されています。この本はデンマークのオーフスにある女性史博物館 Kvinnemuseet で重要な書籍として紹介されていました。



『若者たちよ自分の体を知れ』
 (“Ung kend din krop”)は、若者
 向けに2016年に出されたデン
 マークのノンフィクションです。
 『女たちよ自分のからだを知れ』
 の若者バージョンのようなもの
 です。胸やペニスの形、大きさは人
 によってそれぞれであることや、
 包茎のことなども描かれています



これはスウェーデンで2016年に出された『フェミニズムは現在進行中』(“Feminism pågår”)という12歳向けのノンフィクション作品です。『北欧に学ぶ小さなフェミニストの本』と同じくサッサ・ブーレグレンの作品です。性暴力についての章で女の子に自衛をうながすばかりの日本の社会とは異なり、性暴行を受けたら必ず被害届けを出すこと、被害者が悪いということとは決していないということを心にとめておくことが大事だと描かれています。



また「男の子が加害者にならないためにどうしたらいいのか」を示す例として、ある音楽フェスで、若者政党が男の子が性的暴行をしないための7箇条が掲げ、それがインスタグラムで拡散されたことが書かれています。

デンマークでは教科書だけを使って教えるのではなく、先生が様々な教材を選んで自由に授業を組み立てていく自由度が高いようです。そんな中で先生達に授業のアイデアを提供するようなサイトもあるようです。例えば性教育だと「セックスと社会 (SEX OG SAMFUND)」という性教育についての専門ポータルサイト (<https://sexogsamfund.dk/>)などは、かなりポピュラーです。先生は学校名などを登録すると、動画やワークブックなど教材をダウンロードして使えるようです。

セックス・ホットライン (SEXLINEN) というサイト (<https://www.sexlinien.dk/>) も、子ども達が性についての質問、疑問を性教育のアドバイザーに投げかけることができる仕組みです。女の子にどういう風に前戯をすればいい、とか、彼女が不感症みたいですが、どうしたらいい? など、若者が性について質問できるページもあります。そのほかにも、例えばオーフス大学 Aarhus Universitet のサイトには、性教育についてのこういう本をまるまる閲覧できるようなサイトもあります。

特に近年は、インターネット上の性的なサイトについて、インターネットと子どものかわり、インターネットや AV で得た情報を鵜呑みにしてはいけないということを伝える児童書が多く出されています。”*Sesam Sesam*”という本はデンマークの教材センターでもすすめられた、お隣ノルウェーの絵本です。



ただこの絵本について、北欧でもこういう描き方は当たり前という論調ではなく、大事なテーマだよねと肯定しながら子どもを子ども扱いしない前衛的かつ実験的な作品としてデンマークでもノルウェーでも報じられているようです。「小学校入学前から小学校低学年向け」と現地ではされています。

詳しい書評(※)をノルウェー在住のジャーナリスト鏡麻樹さんが書かれています。

※Yahoo!ニュース(2017年11月16日配信)

北欧社会の扱う絵本作家グロー・ダーレ、新作は「ポルノを見てしまった子ども」

<https://news.yahoo.co.jp/byline/abumiasaki/20171116-00078209/>

この『誰にでも背中がある』(“*Alle har en bakside*”)は、デンマークの教材センターの性教育の棚にあった本です。お隣ノルウェーの本です。水着で隠れている部分はプライベートゾーンで人に触られて嫌だって言って良いんだよ、ということがユーモアを持って書かれている絵本です。小学校入学前ぐらいの子ども向けだと思います。



デンマークでは教材の選択の自由度が日本よりずっと高いようで、その分、教師が一体どんな教材を使ってどう教えるべきか迷うようです。そこで先生がこの教材センターに来て、どんな教材を使えばいいか相談に乗ってもらえます。



そしてこのバッグに入れてクラス分の教材、絵本や本、ゲームなどを、無料で借りることができます。



そしてデンマークで2018年に出された性教育の本も非常に重要です。『セックスって何?』(“Hvad er sex?”)という本です。

私達がこの世にどうやって生を受けたのか、セックスとは何かをあげすけになりすぎず(60年代は性の解放が謳われ、性に対しオープンにな

ろうという声をあげる人が多かったのですが、性の解放がある程度進んだ今では、揺り戻しが起きているようです)、ユーモアたっぷりの文章、イラストをまじえ書いた本です。

思春期の男女の体と心にどんな変化が起きるのかや、体の部位の名称や機能について、解剖学的な図解もまじえ説明されています。避妊についての章では、子どもをもうけるためだけでなくセックスする理由が挙げられている。性的同意についても説明されています。

作者は前書きで、保護者が思春期の子どもに体の変化について話す際、この本が助けになるよう願って書いた、としています。性的欲求について話ができるようになることで、ここから先は嫌という境界線を示せるようになるのではないかと、性的同意の重要性に重きを置くからこそ、性欲について描いたのだと作者は言っています。



この本で素晴らしいのは思春期の子ども達が恋をすること、性的な欲求を持つことを自然なことで肯定的に伝えていることです。

失恋した時に苦しい気持ちになってどうしたらその苦しみを乗り越えられるのか、実践的なヒントも示されています。

『北欧に学ぶ 好きな人ができたら、どうする?』

次に、今年 8 月に出版されたデンマークのYA向けグラフィック・ノベル『北欧に学ぶ 好きな人ができたら、どうする?』を編集集中だった晶文社・松井智さんから、思春期の心と体をテーマとした本作に見られる、多角的な性教育の仕掛けを紹介しました。



北欧に学ぶ 好きな人ができたら、どうする?

アンネット・ヘアツォーク文

カトリーネ・克蘭テ、ラスムス・ブラインホイ絵

枇谷玲子訳

晶文社

『禁断の果実 女性の身体と性のタブー』

続いて、スウェーデンのコミック『禁断の果実 女性の身体と性のタブー』の邦訳の編集をされた花伝社の編集者、山口侑紀さんから「いま『禁断の果実』を筆頭にスウェーデン・フェミニズム・コミックが熱い!——編集者の視点から」という演題でお話いただきました。



禁断の果実 女性の体と性のタブー

リーヴ・ストロームクヴィスト作

相川千尋訳

花伝社

『美容は自尊心の筋トレ』

最後に告知を募集したところ、ライターの長田杏奈さんが、著書『美容は自尊心の筋トレ』（Pヴァイン）についてお話をくださいました。長田杏奈さんは北欧ミステリの熱心な読者でもあるそうです。



『美容は自尊心の筋トレ』では「ミレニアムシリーズ」をはじめ、北欧ミステリについても記述があるそうです。ミステリをジェンダーの観点から語って今まであまりなかったような気がします。今後、何か新しい試みはできないのでしょうか。

スウェーデンのフェミニズムの本

今回の北欧文学サロンの幹事の久山葉子さんから、スウェーデンのフェミニズムの本をご紹介します。久山さんは『スウェーデンの保育園には待機児童はいない』（東京創元社）でエッセイストとしてもデビューされています。



エッセイの中では、日本で子育てするママたちに暖かで力強いエールを送っています。ミステリだけでなく、現地の子育て、教育、児童書のこともよくご存知です。

イベント終了後もたくさんの方が話しかけてくださり、とても嬉しかったです。また皆さんとお会いできるのを楽しみにしております。この度はありがとうございました。

【セミナーD】『あるノルウェーの大工の日記』公開読書会

文◆中村冬美 ・ リセ・スコウ



セミナーDでは書店主さんが5人集まり、中村冬美とリセ・スコウが2017年に翻訳させていただいたオーレ・トシュテンセン作『あるノルウェーの大工の日記』（エクスマレッジ）をテーマに読書会をしてくださいました。

集まってくださった書店主さん

- ◆H.A.Bookstore 松井氏 ◆親子絵本専門ナヌーク 白熊氏
- ◆書肆スーベニア 酒井氏 ◆Readin'Writin' 落合氏
- ◆双子のライオン堂 竹田氏



左から：落合さん、松井さん、竹田さん、酒井さん、白熊さん

私たちが書店主さんを知ったのは、ウェブラジオ(※)を聴いたのがきっかけでした。

(※) 店主の読書会 2019年1月/1回目 課題本『あるノルウェーの大工の日記』

(2019年1月1日配信) <https://honya3.org/?p=232>



私たちの訳した本をテーマに取り上げてくださったことがとてもうれしく、また内容もとても面白かったので、ぜひともこのイベントでも読書会をしていただきたいと思います、ご依頼しました。

まずは作者オーレさんや本書、そしてどの国で出版されているかについて、説明します。

続いて書店主さんがそれぞれ自己紹介をし、北欧とのつながりについて話します。落合さんは『スウェーデンの保育園に待機児童はいない』(久山葉子著)を読んだばかりだそうです。

竹田さんはグーグルマップでバーチャル観光旅行をなさるのがお好きだそうです、今回のイベントのためにオスロの街中をぶらぶらしてきたそうです。なんとその時にくまのプーさんの着ぐるみを着た人が写っていたそうです。

酒井さんは、家を出る前に北欧グッズが家にあるかどうか探されたそうです、エリック・ブルーンErik BruunというフィンランドのグラフィックデザイナーのアザラシTシャツを着てこられました。イケてます! またこの日に持っていらしたマグカップはイッタラブランドでした。



白熊さんはデンマークに行ったことがあるそうです。また白熊さんのお住いの船橋にはアンデルセン公園があって、子どもたちを連れてよく遊びにいらっしやるそうです。

さて本の話。日本にも入ってきて社会現象になった IKEA ですが、本書の中ではちょっと否定的に書かれています。やはり丁寧に仕事をするのがモットーの大工、オーレさんと大量生産の IKEA は対極にあるのでしょう。

この本の概要を説明しますと、大工のオーレさんがある家の屋根裏の改装と増築を依頼され、まず見積もりを作るところから始まり、無事に仕事を受注できて、改装を終えるところまでが書かれています。

たとえば、今流行っている家の外観はどれも白、グレイ、明るいブルグレイといった色合いだ。バスルームは法律や条例のせいで、食肉処理場のタイル張りの作業場と大して変わらないように見える。キッチンはいケアやノレマ、または他のメーカーのコーディネーターに設計されることが多い。彼らは、決してインテリアデザイナーや腕の良い職人のような専門家ではない。小売店の販売員なのだ。

(『あるノルウェーの大工の日記』24 ページ)

出だしからちょっと含みをもたせた表現が飛び出します。職人魂の塊オーレさんの、仕事のこだわりが伝わってくるくんだりです。179 ページでも、もともとはバスルームにイケアの家具を置くつもりだった注文主のペータセン夫妻が、大工さんの提案で、作り付けの家具を置くことに同意しています。

白熊さんは、古い家を改築してお店を始めたそうです。この本を読んでからは、その時に見た日本の大工さんの職人魂が、このノルウェーの大工さんと共通していたと、思うようになったのだとか。



本書には、職人氣質を持つオーレさんならではの、核心的な一言が散りばめられています。職人氣質というと、なんだか堅苦しい感じがしますが、そうではなくて英語版のタイトル「*Making things right*」、つまり「物事をきちんとする」という一文にもあるように、ひとつひとつの物事を丁寧にやって、それを積み重ねていくこと、それに尽きるのです。それはこの5人の書店主さんにも、私たち翻訳者にも通じる気質なのではないでしょうか。

そして、ペータセン氏が一番重要な質問を切り出す。

「ええと……その費用はどのくらいになりますか？」

「無料です」

私は答えた。

「サービスですよ。できれば私に仕事を発注していただきたいですし、良い印象をもっていたら嬉しいので」

これは本心だったが、自分を安く売り込んでいるような気分になったのも事実だ。私は自分に商品価値を付け、売り込む術を学んでいた。以前はこれほど戦略的というか、言い換えれば計算高い考え方はしていなかった。あまり良い気分ではないが、何度も利用されたり、騙されたりした挙句にやっと自覚したのだ。職人としての自分は商品なのだ。

(『あるノルウェーの大工の日記』46ページ)

本屋さんでは、本ばかりでなく書店主さんや書店員さんもいわば商品です。お客さんは本を買うついでに、店主さんや店員さんと話すことをも楽しみにしています。本の価値と店主さんや店員さんの接客、それに加えて書店を運営するためのさまざまな仕事の積み重ね、それによって本屋さんの価値は決まるのだそうです。

本屋さんは、企業からホールに置くような本の選書の依頼を受けることがあるのだとか。またそれに伴って、そういった本の大量注文を受けるのですが、時には相手が値引きを要求してくるのだそうです。そこで書店さんには、一冊20%程度の利益しかなく、運ぶ時のガソリン代や交通費を考えると赤字になってしまうことを伝えて、納得してもらうか、長期的な仕事であれば要求をのむのかは大工さんと同じで葛藤な

のですが、結局はきちんとした利益の出ない形の仕事を受けてしまうと、安かろう悪かろうの仕事になってしまうリスクがあるのだそうです。これはどんな業界でも同じですし、もちろん私たち翻訳者にも言えることです。

私は木を扱う仕事をしている。いわゆる「大工」だ。大工職人の免許と、大工たちを統率する親方の免許、その両方を持って仕事をしている。

(『あるノルウェーの大工の日記』5ページ)

この部分からは、大工として働くには職人資格だけではなく親方資格といったものが必要といったエピソードが紹介されました。

さらに、主人公は報酬や経費、材質などについて注文主や設計士などと交渉する時にも、きちんとその後の人間関係が続くように配慮しているという点も話されました。

松井さんは今、いろいろな日記文学に興味を持っていらっしゃるそうです。このような日記文学の本をご紹介します。



冬の物語 (イサク・ディネセン作、横山貞子訳、新潮社)

波止場日記—労働と思索 (エリック・ホッファー作、田中淳訳、みすず書房)

読書の日記 (阿久津隆作、NUMABOOKS)

四人の交差点 (トンミ・キンヌネン作、古市真由美訳、新潮社)

中村からは、本書は日記をそのまま出版したわけではなく、実際の大工であるオーレさんが、日記形態で書いた日記文学です、といったお話をいたしました。技術者や科学者がノンフィクション文学を書く場合、ジャーナリストやプロフェッショナルの文筆家と組んで執筆を進めることが多いのですが、オーレさんは編集さんと二人だけでこの本を書きました。オーレさんは大学では文学部で学ばれ、当初は文筆業とどちらを目指そうか迷ったあげく、手を使う仕事の方が面白いと考えて、大工の道に進んだのだそうです。



読書会の最後には中村が、未訳本としてスウェーデンのグラフィックノベル・イェシカ・ハルベック Jessica Hallböck 作” GIRLS JUST WANNA HAVE FUN”を紹介させていただきました。



このような
メッセージ
と共に。

om vi matas med sagor om att
tjejers högsta dröm är att bli
räddad av en prins är det inte så
konstligt att tjejer växer upp
och tror att de är misslyckade
om de inte blir räddade av en
snugg och rik man?

もし少女たちが、女の最高の幸せ
は王子様に助けってもらうこと、とい
う物語をずっと聞かされてきたなら、
彼女たちが成長した時に、ハン
サムでお金持ちの男性に拾ってら
れない私は負け犬なのだと思います。
込むのは、ふしぎではありません。

イェシカ・ハルベックさんが女の子たちに薦めたい本の中でも、邦訳されているものをご紹介します。

『世界を変えた100人の女の子の物語』（エレナ・ファヴィッツィ、フランチェスカ・カヴァッロ作、芹澤恵、高里ひろ訳、河出書房新社）

『モモ』（ミヒャエル・エンデ作、大島かおり訳、岩波書店）

『点子ちゃんとアントン』（エーリヒ・ケストナー作、池田香代子訳、岩波書店）



ご参加くださったお客様の皆様、書店主の方々、いらしてくだっただけ本当にありがとうございました。なごやかでとても興味深い読書会になったと思います。



店主のおひとり、双子のライオン堂の書店主、竹田信弥さん、中村冬美、リセ・スコウ

字幕と外国の食べもの 藤野玲充



Tina Stafrén/imagebank.sweden.se

映画の字幕を作るときに「1秒4文字」という目安がありますが、映像翻訳を勉強したことがなくても、このルールを知っている方はけっこう多いのではないかと思います。たとえば、ある人物が話しているセリフが3秒で、その字幕を1画面に表示する場合、最大12文字まで使用できることになります。

この文字数のカウントとにらめっこしながら訳を練るわけですが、今回は北欧の食べものについて、もしセリフに出てきたらどう処理するか考えてみました。

外国、とくにヨーロッパの食べものであれば、名前はカタカナの場合が多いでしょう。（「ヤンソンさんの誘惑」などもありますが、ひとまずおいといて…。）カタカナは漢字よりも多少早く読めるので、少し無

理をしてでも字幕に出したい！ストーリー上、出さざるを得ない！という時には字数の目安を超えた字幕を作ることもあります。

食べものの名前を出した例で有名なのは、フランス映画『アメリ』でクレーム・ブリュレの表面をスプーンで割って食べるシーン。ほんの数秒ですが、記憶に残る印象的なシーンですよ。もし、あそこで「クレーム・ブリュレ」と訳出していなかったら、映画の大ヒットもクレーム・ブリュレのブームもなかったかもしれません。

それでは、北欧の食べものについて見ていきましょう。難易度は筆者の独断と偏見に基づく、字幕に名前を出す難しさの度合いです。

難易度☆ Kanelbulle
シナモンロール（7文字）



Björn Tesch/imagebank.sweden.se

シナモンロールは今やカフェやパン屋さんでも普通に見かけられるほど、日本でもおなじみのパンとなっています。一般的な知名度があれば、字幕には出しやすくなります。

ただ、「シナモンロールを焼いたの」というセリフだったら、1.5秒くらいで流れてしまいそうなので、それがシナモンロールである必然性（そのあとの話の展開で重要なカギになるとか）がなければ、「パンを焼いたの」とする可能性も大です。

難易度☆☆ Knäckebröd
クネッケブロード（7.5文字）
※促音は0.5文字カウント



Göran Assner/imagebank.sweden.se

朝ごはんの時などに食べられているクネッケブロード。北欧ブッククラブの6月の課題書『樹脂』（エーネ・リール、早川書房）にも「クネッケ」が出てきました。カッコ書きで「ライ麦の粉や全粒粉で作る、薄くて平らなクラッカーに似た堅焼きパン」と注釈がついています。

「クネッケ」にすれば字数は少なくなります。字幕では注釈がつけられないので、「クネッケ」がどのくらい伝わるかな…と悩むところです。

難易度☆☆☆ Surströmming
シュールストレミング (9.5 文字)



Tina Stafren/imagebank.sweden.se

塩漬けのニシンを缶の中でそのまま発酵させたシュールストレミングは、すごく臭い食べものの代表格として知られています。いかんせん字数を食うので、言葉遊びやおいの話でない限り、たぶん「ニシンの缶詰」などになってしまうだろうと思われるます。

難易度☆☆☆☆ Semla
セムラ (3 文字)

セムラはカルダモン入りの丸いパンにアーモンドペーストと生クリームを挟んだ、期間限定のお菓子です。スウェーデンでは、冬から春先（クリスマス前後～イースター頃）にかけてお店に並びます。

字数が少ないのになぜ高難易度



Camilla Degerman/imagebank.sweden.se

…?と思われた方もいるでしょう。映像にセムラが映っていればよいのですが、「セムラはどう?」などと会話で出てきた場合、「セムラ」を知らない人は何を思い浮かべるでしょうか。人の名前にも見えるし、地名かと思うかもしれません。字幕に出す場合には工夫が必要そうです。

難易度☆☆☆☆ Prinsesstårta
プリンセスケーキ (8 文字)



Jakob Fridholm/imagebank.sweden.se

表面の黄緑色は薄く伸ばしたマジパン、中身はスポンジとジャムと甘くないホイップクリーム。スウェーデンではお祝い用のケーキとして愛されています。

でもきっと、「プリンセスケーキ」と聞いて思い浮かべるのは、こちらですよ。。。



「プリンセスケーキ」の画像検索結果

こんな感じで、翻訳している最中に画像検索もよく利用します。英語など外国語の単語と、それを単純にカタカナ化した単語のイメージが、イコールではないことも多いのです。

ちなみに、北欧文学サロンで紹介した（※B面16ページ参照）短編映画『レフュジー532』には、「カイクマク（カイクマック）」という食べものが出てきます。カイクマクはクロテ

ッドクリームのような濃厚な乳製品で、バルカン半島や中東、中央アジアの国々でよく食べられているそうです。

そのシーンでは“bread with kajmak”と言っているのですが、わりとストレートに、「カイクマクを塗ったパン」と訳しました。お腹を空かせたボスニア人の少年たちが自分たちの好きな食べものを思い浮かべているところなので、「カイクマク」が分からなくても、故郷の食べものであることは流れて分かるし、パンに塗るような何かということが伝わればここでは十分だと判断したわけです。

以上、字幕と食べもののお話でした。

字数制限など映像翻訳特有の事情を織り交ぜながら書きましたが、リサーチや検討を重ねて訳語を決定するプロセスは、書籍の翻訳でも変わりません。その過程が翻訳の難しさであり、面白さでもあると感じています。

（藤野玲充）

フィンランドの夏の過ごし方
本当に夏の4週間連絡が取れなくなる人達
セルボ貴子



リンゴの木のそばで赤スグリを
摘む次男

夏です、白夜の季節です！

フィンランドのみならず、北欧では冬至が過ぎて、一日数分ずつ日が長くなると夏を心待ちにする人が増えます。春分の3月の頃には南部ではかなり雪も解け、来る春を予感させますし、4、5月には新緑が芽吹き、毎日のように草花の成長はもう目を見張る程、北国の短くいい季節

を目いっぱい享受しようとしているのが感じられます。

この季節になるとアウトドア派もさらに活発に。もともと寒い冬でも家の中に閉じこもらず、新鮮な空気を吸いにしっかり着込んで散歩に出たり、クロスカントリーやウィンタースポーツに興じる人たちですから夏はその活発度が更に増します。



サウナのある湖畔のサマーコテージ

フィンランドはサウナ（sauna）はフィンランド語なのです、ご存知でしたか？）の戸数が国民一人当たり

でも、世界はもとより北欧でももっとも高い国です。他の北欧でもたとえばホテルやプールなどにサウナが併設されていたりしますが、フィンランド人ほど「サウナがない」という愛、いや強迫観念は無いように感じます。自宅にサウナは当たり前、企業の最上階にも来客もてなし用のサウナと、社員用のサウナがあるのも普通ですし、例えば息子の高校にもジム+サウナがあります。



サウナの内部

フィンランド人が夢見る夏の生活は、仕事などを終えプライベートにしっかり切り替えること。従って法律で定められた4週間の休みをきっち



真夏の夕日。これは夏至を過ぎた

23 時頃のもの

りとり、できれば人里離れた湖畔のコテージで毎日自然とたわむれます。具体的にはボートを漕いだり、魚釣りをしたり、薪を割ってその薪でストーブを熱して一日の疲れを薪ストーブのサウナで汗をかいてじっくり取る。熱くなったら裸で湖にドボンと飛び込み、という事を繰り返す（ビールもつきものですが）静寂さと一体となり、真夜中に沈むかどうかのぎりぎりのやわらかな太陽光を楽しみつつ波にたゆたって空を見上げる。こんなところでしょうか。

夏至祭はもっとも日が長くなる頃で、今年（2019年）は6月21日（金）～23日（日）がその週末に当たります。ラップランドでは陽が沈まない本当の白夜となりますが、南部ではさすがに夜中過ぎはぼんやり薄暗い感じです。この週末は特に木曜ぐらいから街中ではもぬけの空となり、家族の、もしくは親戚か友人のサマーコテージにおよばれて、リラックスした週末を過ごします。



ブルーベリー（正確にはブルーベリーの原種で“ビルベリー”と言います）

この頃にはフィンランドの露地栽培のイチゴも旬を迎えるので、不ぞろいながらも真っ赤に熟したイチゴを、指を赤く染めてつまむのは毎年

格別の美味しさです（日本で売られる美しく包装されたイチゴたちより絶対美味しいと私も断言します！）。

新じゃがも最高の風味で、一番いいのはその日の朝掘りたてで指でこすれば皮がはがれるほど、新鮮な土付きを市場で買って、バケツに水を入れ、ジャガイモブラシでこすって泥をおとし、塩とディル（魚料理にもよく使われるハーブ。これを一束どーんと使います）を入れた鍋で茹でます。素材の味を楽しむのはこういう事かとしみじみ思える味の良さです。

じゃがいもに、この季節ならではの天然の鮭に塩をして薄くスライスした刺身に近いものを添えれば夏らしいフィンランドの食事の出来上がり。パンはライ麦と、ブラウン・シロップ入りのアーキペラーゴ（群島）地域のパンというものがあり、魚料理によく供されるのが定番です。

アウトドアを楽しみ、自然の恵みでおなかを満たし、夜はじっくり熱したサウナに入り、暑くなったら泳

いで汗を流し、またサウナへと、数回繰り返し返せば、もうぐっすり眠れる事間違いなし。

ただ、大人はお酒に飲まれちゃう人が多いので、クリスマスや夏至といった年間行事の頃にはアルコール飲料の売り上げがかなりのものですが、休み明けに仕事に出てこない（来れない？）人も増えるように思うのは私だけではないでしょう。これがなければとってもいい人たちなのですが...

また、夏至には悪霊を遠ざける意味があるようで1800年代後半にかけて徐々に各地に広まったかがり火が各地で水辺に焚かれます（※全国ではありません。）。

子どもたちは6月初めから2か月半の夏休みを多かれ少なかれこのよ

うな環境で過ごします。年度をまたぐ休みなので、宿題もありません。成績表を貰う時に先生から「本をたくさん読みなさいね！」と言われてそんな事をすっかり忘れて過ごす夏は最高だろうなとおもいます。親は大変ですが、こうしてしっかり充電してまた8月半ばの学校に戻っていくのです。



湖畔で魚釣りをする夫と
小さかった息子たち

サウナにまつわるあれこれはまだまだあります。白樺の若枝を束にし、サウナで体を叩くための *Vihta* (ヴィヒタ) が血行を良くしますし、薪で何時間も燻すスモークサウナのえもいわれぬ体験や素っ裸になって湖で泳ぐ解放感も。
(セルボ貴子)

北欧にまつわるエッセイⅢ



ある数学者のスウェーデン・ミステリーとの出会い どうしてスウェーデン語で読むようになったのか 服部久美子

芸術的な表紙に惹かれて買ったヘニング・マンケルの『殺人者の顔』（東京創元社）のドイツ語版。話は老夫婦が隣の家の異変に気付く場面から始まります。何か思い出さなければいけないことがある、だから目が覚めた。そうだ、隣の馬が今朝はいなくなかった。台所の窓も開いている。年寄り戸締りを何度も何度も確かめるものだ。作者の「古い」の描写は見事でした。これは主人公のヴァランダー警部に引き継がれ、老いと死に対する恐れ、自分が時代遅れになって世の中に取り残されるのではないかという不安として、交響曲の主題のように繰り返し現れます。謎解きよりも人間描写、普通の市民の目から見たスウェーデン社会に興味を惹かれてマンケルが好きな作家になりました。

マンケルの「ヴァランダー・シリーズ」は、平易な文章で書かれているので最初はドイツ語の練習として読んでいました。（ちなみに、外国語の練習用のやさしい読み物としては、子供用の本より平易な文体の現代ミステリー

の方が読みやすいようです。)



ドイツ語のヘニング・マンケル
『殺人者の顔』の表紙です。
この表紙につられて買いました。
(シリーズ全部黒がバック)

スウェーデン語がまだ初級だったころ、偶然、翻訳者の柳沢由実子先生のマンケルの『タンゴ・ステップ』を原書で読むクラスを見つけて「こんな機会はもう一生ない」と、おそろおそろ受講申し込みをしました。

テキストを見ると「ドイツ語と英語によく似てる!」、辞書の助けをかりれば何とかなりそうです。それでも、ひとつでも辞書を引き損ねた単語があって、前後から見当つけて適当に訳したりすると柳沢先生に見つかって、ピシッと直されます。授業を通して、先生のひとつひとつの言葉を大切にする誠実さに感銘を受けました。このクラスは4か月で終わってしまいましたが、これに出会わなければ、まさかマンケルを原書で読もうとは一生思わなかったでしょう。

偶然はさらにつながっていきます。Twitterでヨナス・ヨナソンの『窓から逃げた100歳老人』（西村書店）についてつぶやいたときにスウェーデン在住のエリコさん（オーグレン英里子さん、訳書：トーマス・エリクソン『世界にバカは4人いる』フォレスト出版）が反応してくださったのをきっかけに、スウェーデンにいる日本人の友人が次々できて、ホーカン・ネッセル、モンズ・カッレントフトなどおすすめミステリー作家をたくさん教わりました。

翻訳者の久山葉子さんともそうして知り合い、久山さんが実行委員をしているスウェーデン・ミステリフェスティバル（※B面2~14ページ参照）にもお邪魔するまでになりました。作家さんの話が直接聞ける機会なので予習にヨルン・リーエル・ホルスト、ヴィヴェカ・ステンなどがんばって読みました。スウェーデン語で読んだ本は今ちょうど60冊になります。



フェスティバル予習

原著ではとても読み切れないので
英語版も混じってます。

現代の日本語訳の「すばらしさ」に気付いたのも柳沢先生やこうして知り合った翻訳者さんたちのおかげです。かつては翻訳というときこちない文章というイメージがあったかもしれませんが、現在活躍中の翻訳者さんたちの文章は自然で読みやすく、原作に対して誠実です。次々に面白そうなミステリーが出て、原著で読んでいたらとても追いつけない。ですから日本語訳もかなり読んでいます。

さらに「訳者のあとがき」はボーナスです。例えば、久山葉子さんが訳したカッレントフトの『冬の生贄』（東京創元社）には、スウェーデンに住んでいる久山さんが自分の目を見たことをもとにした解説があります。外国にルーツをもつ警官の「移民がピッツェリアやクリーニング店を営むのを禁止すればいいのと思う」というセリフ（その意味は『冬の生贄』を読んでくださいね）を引用した移民問題の解説が特に印象に残っています。

そして今は運命の気まぐれかこのグループに入れていただいています。おかげで数学、物理に関する部分のチェックという形で翻訳者さんたちのお手伝いをしたい、という定年後のプランまでできています。

北欧にまつわるエッセイⅣ

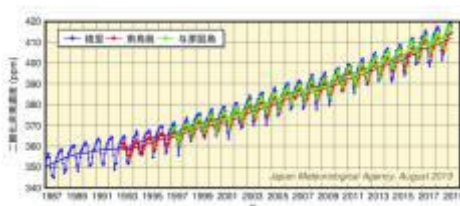


現代スウェーデンを代表する女性、グreta・トゥーンベリ 羽根由

ちょうど1年前の2018年8月20日、スウェーデン国会の前で「気候のための学校ストライキ」を始め、今やヨーロッパ中に影響を与える気候・環境アクティビストのグreta・トゥーンベリ。

「地球温暖化への取り組みを求め、15歳の女の子が学校に行かず国会前に座り込んでいる」とのニュースは私も見たが、それが歌手のマレーナ・エルマンの娘だと知ってびっくり。

「私たちの家（地球）は燃えている。けれども、誰も危機を危機として扱っていない」と彼女が訴えるまで、私も地球温暖化は問題だけど、そこまで深刻だとは思わなかった。今や私たちの吸う空気中の二酸化炭素はどんどん濃くなり、人類はかつて経験しなかったような空気を吸っているらしい。



「月平均濃度と季節変動を除いた濃度」図

国土交通省 気象庁 ウェブサイト「二酸化炭素濃度の経年変化」より

「未来がないのなら、なんのために学校へ行って勉強するの？」

「みなさんにはパニックになってもらいたい」

「気候の問題を子どもたち（次の世代）に押し付けるなんて、あなたたちは、おとなげがない」

「私と話したくない？ 結構。私だって話したくありません。でも、科学者の言うことは聞いてください」

齒に衣着せぬ彼女の発言は同世代の心を揺さぶり、世界各地で若者によるデモが続いている。



ドイツのデモに出現したグreta山車。今の子ども・若者の目には、「わるいおとな」をばっさばっさと斬る（言論で、ですが）頼もしい存在として映っているのだろう。

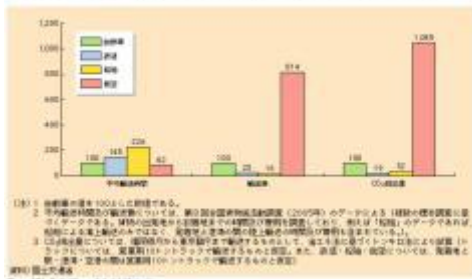
三つ編みヘアスタイルは『長くつ下のピッピ』のピッピを彷彿とさせ、小柄で映像記憶がある（母親によると）という点は『ミレニアム』のリスベット・サランドルを思い起こさせる。グreta・トゥーンベリは現代スウェーデンを代表する強い女性なのだ。

二酸化炭素の排出量削減を訴える彼女は飛行機に乗らない。だから、スウェーデンからニューヨークの国連会議に参加するために、レースヨットに乗って大西洋を横断中だ（※エッセイ執筆当時）。

出航前のニュースで、そのヨットには暖房もトイレもなく、人目につかないデッキでバケツに用を足す、と紹介されていた。16歳の少女が……と私は

ここでも驚いた。

図表1-2-1-34 福岡県～東京都間輸送時のモード別 輸送時間・費用・CO₂排出量の試算



国土交通省のデータ。たしかに飛行機の二酸化炭素排出量は飛びぬけて大きい。出典：国土交通省ウェブサイト（福岡県～東京都間輸送時のモード別 輸送時間・費用・CO₂排出量の試算）

グレタの渡米手段をめぐっては、貨物船に乗ってアメリカへ行くのではないか、との予想もあった。手続きを踏めば、乗客として貨物船に乗りこむことは可能らしい。

それなのに、なんでまた、そんなに大変な旅を？ 24時間揺れ続ける狭いヨットに2週間も乗り続けて心理的に大丈夫？ 数年前は拒食症になるほど繊細な神経の持ち主なのに？ と私は心配したのだが……。

彼女が発するメッセージは、「私は本気」ということだろう。「私は本気で地球の行く末を心配している。二酸化炭素を排出しないためなら、大変な旅もいとわない」という。

彼女の願いは「私の話ではなく、科学者の話を聞いてほしい」ということ。私たちはグレタの動向にあれこれ言いがちだが、まずは地球温暖化についてもっと真剣に勉強すべきなのだろう。

「大人たちは私たちと一緒にセルフイーを撮り、私たちの行動を称えるけれど、そのために私たちは教育を犠牲にしているわけではない」というグレタのスピーチが、今の私の胸に突き刺さっています。

(羽根由)

『リンドグレーンの戦争日記』副読本としての評伝ブックリスト

よこのな



『リンドグレーンの戦争日記』

アストリッド・リンドグレーン著、
石井登志子訳、岩波書店、2017年

『リンドグレーンの戦争日記』とは？

7月の「北欧ブッククラブ（A面63ページ参照）」の課題書は、「スウェーデンのノンフィクション」というお題の候補から選ばれた『リンドグレーンの戦争日記』（以下『戦争日記』）でした。

この本の原書（*"Krigsdagböcker 1939-1945"*）は、2015年5月、第二次世界大戦終結から70年となる戦勝記念日に出版されました。原書は大判で368頁、日記本文だけでなく、日記帳の写しの画像も収録されています。アストリッドは、ドイツがポーランドに侵攻した1939年9月1日に日記帳に「ああ！

今日、戦争が始まった」と書き、それから1945年12月31日まで6年以上の間、この戦争に関する記録を個人的な日記としてノートに書きつけていたのです。そんなに長く書くことになるとは、アストリッドも思っていなかったでしょう。

日記帳の数は17冊、その日記帳は戦後は洗濯かごの中に入れて自宅で見守られていたそうです。夜に新聞を切り抜いて、何事かを小さなノートに書きつけている母親を見て、幼かった娘のカーリンは、どこの親もやっていることをうちの母親もやっているんだらうな、と思っていたそうです。そんなことをしているひとは、おそらくとても少なく、またそうした日記が出版されることも、あまり多くはないと思われる。

実際の日記帳

Photograph by

Ricard Estay

(from <https://www.astridlindgren.com>)



日記には、新聞の切り抜きだけでなく、

戦争の2年目から働いていた戦時検閲局で仕事として読んだ手紙の写しもはさんでありました。個人の記録だけでなく、当時の資料も合わせて読むことができる日記作品というのは、あまり例がないのではないのでしょうか。最初にこの本を手にしたとき、そのことにとっても驚きました。

日本語版が出版されたのは、2017年11月です。ヨーロッパの戦況に関する覚え書き、当時の新聞や週刊誌の切り抜き、手紙など、大量の資料を収録しているために、翻訳作業はきっと時間がかかるに違いない、と思っていたので、2年ほどで日本語版が出版されたことに驚きつつも、感謝しました。

日本語版では、新聞記事はほんの一部の抜粋になっています。すべてを収録しようとする、確認作業もおそらく膨大になるということはよくよくわかりますし、少しでも早く日本語で届けることを選ばれたのだらうと思っているのですが、貼り付けや挟み込み部分の全訳も欲しかったなあと、いう想いも持っています。増補版として出していただければうれしいな……。

アストリッドと戦争についての日記

さて、『戦争日記』が書かれたのは前述のように1939年から1945年です。作家として初めての単行本が出版されたの

は1944年、代表作となる『長くつ下のピッピ』が出版されたのは1945年です。それ以前からも新聞などに単発で短編小説を発表していたようですが、この日記を書いていたアストリッドはまだ作家とは呼べない状態、言い換えれば、ちょうど作家になろうとしているところでした。

『戦争日記』を書き始めたとき、アストリッドは31歳、1945年大晦日には38歳になっていました。30代のほぼすべてのあいだの記録である、ともいえます。

『長くつ下のピッピ』がどんなふうにして物語になっていき、それがどんな経緯で出版されることになったのか、読者であればおおまかには知っている有名なエピソードがあります。『戦争日記』の中では、それがリアルタイムで進行していく様子だけでなく、そういうことが起きているのがいったいどんな状況下であったのか、ということも知ることができるのです。

はずかしながら、わたしは『戦争日記』を読むまで、このことをきちんと理解できていませんでした。年代と状況を合わせて考えれば想像はつくことなのですが、1945年に出版されたんだなあ、とぼんやりと思ったことはあるものの、それがスウェーデンではどういう時代だったのかということもきちんと考えてみたことが、ほとんどありませんでした。

また、これまで直接には語られることがなかった、作家としてのアストリッドの基礎になっているものが、ここにあるのではないかと、とも思いました。それについては、ぜひ『戦争日記』を読んで、感じたり考えたりしていただきたいなと思います。

彼女の生き方を知るうえで、本人の言葉で綴られている『戦争日記』は、とても刺激的で最高の文献だと思います。

けれども、作品は読んではいても、その生涯についてはそんなに知らない、というひとがいらしたら、『戦争日記』を読むにあたって、彼女の生涯を先にざっとおさえておくと、スムーズに読めるのではないかなという気がします。

アストリッドというひと

わたし自身は、子どものころからその作品を愛読していたものの、ひととしてのアストリッドに興味を持つようになったのは、彼女が亡くなってからのことです。

ちょうど彼女が亡くなった2002年1月29日はスウェーデンにいました。お昼ごろにニュースで逝去を知り、夜にはもう特集番組が放映されていたのを覚えてます。翌日の新聞も一面に大きな写真とともに、記事が多く掲載されていました。世界的な人気があるとはいえ、児童文学の作家がなぜこんなに大きく取り上げられ

るんだろう、と少し疑問にも思いました。

後に、彼女の晩年の活動によって、社会的な知名度が上がっていったのだということを知り、納得しました。ましてその生き方を知るにつれ、もっと知りたいという気持ちがわきました。

そんなふう思うひとは多いのか、本国はじめ北欧でも、評伝はまだまだ出てきています。読者との手紙のやりとりをまとめた書簡集なども発表されています。作品論や編集者としての彼女について書いた評伝もあります。

また、若いころを描いた映画「Unga Astrid (若きアストリッド)」も製作され、日本でも「リンドグリーン」という題で、2019年12月の公開が決まっています。

30代で『戦争日記』を書くにいたるまでの若き日。そこから作家の道を歩み出し、作家として、また名編集者として、スウェーデンの児童文学を牽引した時代。さらにその正義感から、オビニオンリーダーとして否応なく社会変革に乗り出していくことになる晩年。

なかなか波乱万丈のように思える94年の生涯を送ったアストリッドですが、派手に注目を浴びる生活を望んだわけではなく、けれども率直に、必死に、実直に、日々を重ねた結果がこうだったのかな、という気も個人的にはしています。

日本語で読める評伝いろいろ

さいわいなことに、アストリッドの人生については、すでに日本語で読める評伝がたくさん出ています。ざっとですが、以下にまとめてみました。品切れになっている作品もありますが、図書館などで手に入るものが多いと思いますので、ぜひ手に取ってみてください。

『ピッピの生みの親 アストリッド・リンドグレン』(三瓶恵子著、岩波書店、1999年)



日本語で書かれたものです。作家本人へのインタビューはありませんが、娘や友人、仕事を一緒にしたひとなどの声が収録されています。作家として、オピニオンリーダーとしての、彼女の生涯の歩みがわかるだけでなく、作品のテーマについての考察もあり、いちばんオーソドックスな評伝だと思います。残念ながら2018年8月現在品切れです。全体としてよくわかる度★★★★

『遊んで、遊んで、遊びました——リンドグレンからの贈り物』(ジャスティーン・ユンググレン著、うらたあつこ訳、ラトルズ、2005年)



なんと木登りしているのは晩年の本人、という表紙が印象的な本書は、スウェーデン語で1992年に出版されているものを翻訳したものです。本人へのインタビューが収録されています。著者が大好きな作家に会いに行き、話を聞きながらエピソードをふくらませていき、またアストリッドの言葉に戻る、という構成のため、少しわかりづらい部分があります。アストリッドと作品への愛が止まらない! という感じです。こちらも品切れです。わくわくが伝わってくる度★★★★

『愛蔵版アルバム アストリッド・リンドグレン』(ヤコブ・フォッシュェル監修、石井登志子訳、岩波書店、2007年)

2007年、アストリッド生誕百周年記念としてスウェーデンで出版されたものの翻訳版です。アルバムとあるように、厳選された多くの写真で構成されています。



1907年、日本でいうと明治40年の生まれで、これだけの写真が残っているとは、と驚きます。とても大判でちょっと扱いづらいのですが、キャプションもしっかりと書かれ、さらに各章の導入部にも文章あります。情報量でいえば、たくさんある評伝の中でもダントツだと思います。死後に発表されているだけあり、人生での困難や家族関係などについても詳しく書かれていますが、アストリッドの両親の出会いについての物語も収録されているなど、本当におもしろい本です。こちらは今でも手に入ります。

情報の量と種類の豊かさ★★★★



『遊んで遊んで リンドグレンの子ども時代』（クリスティーナ・ビヨルク文、エ

ヴァ・エリクソン絵、石井登志子訳、岩波書店、2007年）

スウェーデン南部・スモーランド地方の小さな農場に生まれ育ったアストリッド。兄と妹ふたりの四人きょうだいとして、遊び死めんじやないかと思っただけくらいに楽しく過ごした、こども時代にフォーカスした作品です。アストリッドの書いた物語が好きなら、とくに「やかまし村」や「ピッピー」が好きなら、どのページも「あ、これ!」「ああ、それー!」と楽しめるエピソードが満載です。

こども向けに書かれたものですが、彼女が後にこども時代の思い出として何度も語っている出来事や気持ち、体験が書かれているため、作家としての彼女を形作っていったものが何なのかを感じることができる、とてもよい評伝だと思います。

楽しく読める度★★★★



『平和をつくった世界の20人』（ケン・ベラー、ヘザー・チェイス著、作間和子、浅川和也、岩政伸治、平塚博子訳、岩波書店、2009年）

これは世界各地で平和運動を自分のやりかたで行ったひとびとを取り上げた、岩波ジュニア新書です。ソロー、カーソン、ガンジー、マーチン・ルーサー・キングなどに並んで、「あらゆる命を重んじる」という章で、アストリッドが取り上げられています。

それまでも作品で数々の議論を巻き起こしてきましたが、70代目前にして、アストリッドは直接社会に物申す姿勢を見せます。娘カールンは「生まれて初めて胃が痛くなった」と話しています。

本書では、そうしたオピニオンリーダーとしての部分にフォーカスし、課税制度に反対する運動、こどもへの暴力禁止、動物の権利を保護するための運動などに取り組んだことを中心に書かれています。原書は英語で書かれているため、ウェブサイトからの情報が多いようですが、アストリッドの人生全体についてもキュッと非常にわかりやすくまとめられています。

すぐ読める度★★★★

B面43ページで紹介されている『世界を変えた100人の女の子の物語』（エレナ・ファヴィッリ、フランチェスカ・カヴァッロ作、芹澤恵、高里ひろ訳、河出書房新社）でも、100人の女の子のひとりとして、アストリッドが紹介されています。

1939年9月1日

ああ！ 今日、戦争が始まった。だれもがまったく信じられない思いだ。昨日の午後、ヴァーサ公園で私とエルサ・グッランデルが座るそばで、子どもたちは走りまわったり、遊んだりしていた。二人して陽気に、軽くヒトラーのことを罵り、戦争にはならないだろうということで意見が一致した——そして、今日だ！

（『リンドグレーンの戦争日記』3ページ）

上に引いたのは、『戦争日記』の書き出しです。アストリッドがこのように書いてから、80年。この機会に『戦争日記』が広く読まれることを願っています。

戦後のスウェーデン児童文学界を牽引したのが彼女であれば、日本にも同じような存在が。それは石井桃子さん。編集者、翻訳者としてこどもたちのための本を作り続けたふたりは1907年生まれ、同い年でした。

（よこのな）

『三つ編み』担当編集者・窪木竜也さんインタビュー

文・インタビュアー：枇谷玲子

協力：中村冬美・久山葉子



「北欧語書籍翻訳者の会」には、男女平等に強い関心を持っているメンバーが多く、このところ話題になっているフェミニズム小説『三つ編み』も、私達のアンテナに引っかかりました。しかも担当編集者が以前、会のレジュメ勉強会で、講師をくださった窪木竜也さんだと知り、この本についてお話をうかがうことにしました。

作者：レティシア・コロンバニ 訳者：齋藤可津子

出版社：早川書房 出版年月：2019年4月

◆まず読者への自己紹介も兼ねて、窪木さんの編集者としてのご経歴をお聞かせください。

▶▶大学4年生のときから人文系の学術書出版社で数年働いたあと、早稲田大学が発行母体である文芸誌「早稲田文学」で小説と批評の編集をしていました。



文芸誌「早稲田文学」



ちなみに、今回のインタビューのテーマの1つ、フェミニズムに関連していうと、川上未映子さんが責任編集の「早稲田文学 女性号」（2017年9月刊行）の企画には時期的に関わっていません。

2016年5月に早川書房へ移り、いまは小説、ノンフィクションや児童書などを手がけています。

◆一般読者だった頃、好きだった本は何ですか？

▶▶学生のころはフランス文学をかじっていて、野崎歓さんが訳して

いたジャン＝フィリップ・トゥーサンの作品やミシェル・ウエルベックの作品など、現代フランスの小説をよく読んでいました。

あと批評や文芸評論をよく読んでいて、斎藤美奈子さんの『妊娠小説』（筑摩書房）『紅一点論』（プレジデント出版局、筑摩書房）などを通じてフェミニズムやジェンダー・スタディーズを知りました。

そこで読んだ上野千鶴子さんや竹村和子さんたちの本や発言が、自分にとっても深く響くところがありました。20代前半の頃、とくに「男はかくあるべし」みたいなのが嫌だと思っていた時期があったので、性役割や性規範を批判的に問うフェミニズムに助けられたという思いがします。そういう経験があって以降は、自分自身はもちろん、身の回りや社会に対する批判的な視点をフェミニズムから学んでいるつもりです。

早川書房で携わった仕事でいうと、アメリカの小説家エマ・クラインの『ザ・ガールズ』（堀江里美＝訳）という作品があります。これは、あるコミュニティのカリスマに惹きつけられ支配された若い女性たちが、行き着く果てに大きな罪を犯してしま

う話です。



『ザ・ガールズ』

主人公は、自由に見えた彼女たちに憧れつつ、コミュニティ内で彼女たちの自由を奪っていく男たちの所業を記しています。じつは、クラインと『ザ・ガールズ』に対して、過去に交際していた男性が「自分の作品の盗用だ」と訴えました。さいわい、この訴えは裁判で棄却されましたが、女性の成果物を奪おうとする男がここにもいたのです。

◆今回の『三つ編み』はどこで見つけ、なぜ出したと思ったのですか？

▶▶フランス現地の出版社から紹介されました。2018年夏に知った時点でフランスでは33万部を超えるベストセラーになっていたの、目に留まりました。インド、イタリア、カナダに暮らす3人の女性の人生が意外なかたちで交差する、という物語もおもしろい。そこで調べたり読

んだりしてどんどん惹かれていって、実際に全文を読んだら「これはすごい！」とさらに感動しました。

◆私達も読んでいて、こんな風に3人の物語が重なっていくのか！と思わず膝を打ちました。タイトルとなっている『三つ編み』には、3つの物語が編み上げられていくという以外に、どんな意味がこめられていると編集していて感じましたか？

▶▶私は作者ではないので、こうだとは言にくいのですが。髪は、女性たちをつなぐ絆やネットとしても読めますよね。ある人の指摘ですが、三つ編みは、無垢なイメージもありますし、命綱のようでもあります。女性としての尊厳や女性性の象徴とも言えるのかもしれませんが（訳者あとがきより）。

ドイツ版『三つ編み』のカバーは文字どおり三つ編みが描かれています。それを、ドイツの読者が自分の髪に重ねているインスタグラムを見て、「三つ編みへの思い入れは国を超えて存在するのだなあ」と感心しました。

◆北欧はアンチ・ルッキズムの思想

が強いのですが、ポリティカル・コレクトであることにとらわれすぎると、段々、誰かがかわいいとかきれいとか思うこと自体が悪いことじゃないかと自分を責めてしまったり、体を個の一部と捉えるのは愚かなことなのかと、迷いが生じてしまったりします。でもこの作品の中では、髪というのは女性のアイデンティティ、自己を構成する一部であると書かれていたので、読んでいて、ふっと心が楽になりました。

◆現在、『82年生まれ、キム・ジョン』（チョ・ナムジュ=作、斎藤真理子=訳、筑摩書房）（以下、『キム・ジョン』）をはじめ、女性の生き方、男女の不平等を描いた作品が日本でも注目されています。そんな中で今、『三つ編み』を日本に紹介する意義は何でしょう？ 韓国のように社会状況、ジェンダーギャップ指数が高い国でなく、文化的、社会的隔たりのある国の作品を紹介する際に、読者に自分達に関係ない、遠い国の異質な物語と思われぬよう、どんな工夫をしていますか？

▶▶私がこの作品と出会ったのは、『キム・ジョン』がヒットする前の

ことでしたが、企画段階から#MeTooの話題はよく見かけましたし、それ以前にもフェミニズムの話題はよく出ていたと思います。ただ、徐々に『キム・ジョン』の存在感が大きくなっていきました。『三つ編み』の説明をするときに例として出し、店頭では並べてもらい、読者のかたの感想でも比較されています。



『82年生まれ、キム・ジョン』

『三つ編み』を編集して感じたのは、『キム・ジョン』をふくめ、多くの方によって、道が拓かれていたということです。『三つ編み』自体は素晴らしい作品ですので、私はその道にきちんと乗って、いろいろな方に届けることを考えました。いまのところ、読者の方々からいい評価をいただいているので、道を塞がないでいられているかなと少しほっとしています。今は次につなげることを考えはじめました。

この本は、イタリア、カナダ、イ

ンドが舞台です。カナダは多文化主義を国の政策としていて、2015年にトルドー首相が組閣した内閣では閣僚の男女比が同じうえ、ルーツやセクシュアリティにも多様性が見られて、日本でも話題になりましたよね。そのカナダのジェンダーギャップ指数ランキングは16位。日本は110位で、もっとも近いのはインドの108位です（順位はすべて2018年のもの）。

◆この本にはインドの不可触民、スミタが登場しますね。不可触民というものの自体、日本ではあまり知られていない存在なので、それについて扱うことをどのようにお考えになりましたか？

▶▶たしかに今の日本では、聞き慣れないという人も多いかもしれません。人々の排便を素手で拾い集めるというスミタの仕事と、それに対する仕打ちを読んで、「こんなに酷い差別が今もあるのか」と驚いたという声はよく聞きます。不勉強ながら、私自身もそう思いました。企画する段階でも、どれだけの前提知識が読者に必要とされるのかは懸念する点でした。

ところが、読んでみると、ダリットと呼ばれる被差別民のことを知らない人にも読めるように、説明したり工夫して伝えたりしています。そうやって読みやすくしたことで、読んで衝撃を受けたあとに、インドの差別について調べるという人もいます。私もその一人です。

原書のカバーはシルエットだけでディテールはわからないようになってはいますが、インドの母スミタと娘ラーリタを思わせます。日本版では、「ラーリタのその後」というコンセプトで、網中いづるさんに装画を描いていただきました。



『三つ編み』
フランス語版

もう一つの国、イタリアのジェンダー・ギャップ指数ランキングは70位です。著者のレティシア・コロンバニさんは、女性の置かれた社会的な位置や生きやすさが、大きく異なる3つの大陸、3つの国、3つの物語を描きたかったようです。

◆『三つ編み』インド編から抜粋

(前略) この国では、強姦は被害者の罪になる。女に敬意は払われず、不可触民ならなおさらのこと。触れても見てはいけないはずの者を、恥ずかしげもなく強姦する。借金を返せない男を罰するのに、妻を強姦する。人妻に手を出した男を罰するときは、姉妹を強姦する。強姦は強力な武器、大量破壊兵器だ。伝染病だとも言われる。最近、近くの村の委員会が下した決定が噂の種になった——若い女ふたりが村の広場で全裸にされ、強姦されるという宣告で、それは彼女らの兄が人妻、しかも自分より上のカーストの人妻と駆け落ちした罪を贖うためだった。宣告は実行された。

(『三つ編み』95ページ)

(前略) この国では、毎年二百万人の女性が殺される。二百万人の女たちが男の蛮行の犠牲となり、世間の無関心のなかで死んでいく。全世界は気にもかけない。世界から見捨てられている。

(『三つ編み』95ページ)

◆窪木さんは早稲田文学でも、現在の早川書房でも、文芸作品も多く手がけているようですが、編集者さんの中には商業的な理由から、なかなか文芸作品に取り組みなくて残念に思っている方もいらっしゃるのではないのでしょうか？ 私達の中にも文学作品を訳してみたいけれど、文学作品を出してくれる出版社をなかなか見つけられずにいる人もいます。

「日本翻訳大賞」や「はじめての海外文学」や韓国文学紹介の様々な動きなど海外文学を盛り上げようとする動きはありますが、実際書店に足を運ぶと、海外文学があまり置いていなくて、悲しくなります。海外文学はこのまま廃れていってしまうのでしょうか？ 一編集者として、海外文学の復権のためにどんなことができるかと考えていますか？ お考えをお聞かせください。

▶▶今のご質問は問題があまりに大きいいうえに一般論では話せないので、『三つ編み』に限定してお話します。この作品は、ふだん翻訳小説を読まないひと、さらにいえば小説を読まないひとに届けるにはどうすればよいかを考えて編集しました。

どの本でも同じことは考えるので

すが、今回は特にきっかけがありました。そもそもレティシア・コロパンニさんの文章は、かなりシンプルで情景描写も少なく、メタファーも複雑すぎないものです。齋藤可津子さんの訳文もとてもいい。原稿が届いてすぐに社内でも読んでもらうと、小説よりもノンフィクションを好む男性社員のひとりから「この小説は面白い」という声が上がリ、可能性を感じました。

発売前のプロモーションとして、冒頭を抜粋した小冊子を作って、書店員さんに読んでもらうようにしました。



プロモーション用小冊子

同時に、Twitter などを通じて、フェミニズム小説に興味がありそうな方に声をかけて、グラを読んでほしいとお願いしました。そうして、梅田 蔦屋書店の河出真美さんやノンフィクション・ライターの佐々涼子さんに刊行直後にレビューを書いていただけました。

◆ 『三つ編み』カナダ編から抜粋

鏡を見れば、すべてにおいて成功した四十歳の女性がいた――三人のすこやかな子供、高級住宅街にある手入れの行きとどいた家、誰もが羨むキャリア。雑誌でよく見る、充実して微笑む女性そのものだ。彼女の傷は見えない、完璧な化粧と高級ブランドのスーツに隠されて、外からはほとんどわからない。

だが、それはあった。

国じゅうに何千もいる女性と同じく、サラ・コーエンはまっぴたつに引き裂かれていた。爆発寸前の爆弾だった。

(『三つ編み』36ページ)

▶▶そして、もう1つは『キム・ジョン』をお手本にしたのですが、小説の解説を、ノンフィクションの書き手に依頼しました。フランス在住のライターの高崎順子さんです。高崎さんには『三つ編み』がフランスでどのように読まれているか、そしてなぜ作中にフランス人は登場せず、インドやイタリア、カナダの人々が出てくるのかという点を、ジェンダ

ーギャップ指数から読み解いていただきました。このインタビューでも話題になったように、ジェンダーギャップ指数は、読解の切り口としてとてもわかりやすい。社会問題とつなげて考えやすいものです。

高崎さんはまたハフポストで著者のインタビュー(※1)までしてくださいました。その後、東洋経済オンラインで阿古真理さんにも著者の取材(※2)をしていただけました。これらの媒体が小説を扱うことも、それほど多くはないと思います。

これらが功を奏して、広い層に届けられつつあるようです。

『三つ編み』の巻頭には、フランスのフェミニストであるボーヴォワールの言葉があります。当然、ほかにもフェミニズムの思想がベースになって作られた作品ですが、そういったフェミニズムの歴史をまだ知らない人でも楽しんで読めるようになっています。

※1 ハフポストインタビュー

(2019年4月24日配信)

「人間が好きならフェミニストなはず」
フランスで100万部突破「三つ編み」の著者、日本を想う。

https://www.huffingtonpost.jp/entry/storymitsuami100_jp_5cbfb4ece4b0ad77ff7cc085

※2 東洋経済オンラインインタビュー

(2019年6月7日配信)

フランスで100万部「女の生き辛さ」わかる小説——『三つ編み』が描いた女性の葛藤と強さ

<https://toyokeizai.net/articles/-/285386>

◆フェミニズム運動の歴史を振り返ると、世界女性会議が1975年にメキシコ、その後コペンハーゲンなど様々な国で開かれたりと、国境を越えた女性達の連帯が重要であるように思えるのですが？

▶▶この作品では、国や言語を越えたつながりは明確に意識されているように思います。どこまで#MeTooになぞらえているのかは分かりませんが。

◆男性読者から反発はありましたか？

▶▶小説に対してはほとんどなかったです。感動したという感想のほうが多くて、身につまされるという感想はまだ聞いていないのですが。それ

よりも、本書へのレビューや著者のインタビューに対して反対意見を書く人がかなりの数いました。

◆遺伝というのがひとつキーワードになっているように思えますが、遺伝に関する本は注目されてるのでしょうか？ アシュケナージの女性の5人にひとりが乳がんにかかるとか、インドの不可触民の女性がひどい扱いを受けるとか、代々受け継がれてきた呪いのようなものに立ち向かう点もクローズアップされていたように思えますが、いかがですか？

▶▶アシュケナージのくだりは、カナダ篇のところですね。イタリア篇では受け継がれる家業、伝統的な家族観が強調されていますし、共通するテーマだと思います。個人を越えた「宿命」と言えるかもしれません。圧倒的な強制力をもつ「宿命」に、強大とは言えない女性たちが勇敢に挑み、流れを変えていく、というのがこの小説のテーマと言えるでしょう。

◆スミラ、サラ、ジュリアという3人の女性がどうつながっていくかが、最後まで読まないといけないとこ

ろがこの本の面白さですね。その点で何か工夫されましたか？

▶▶英語版の作品紹介ではネタバレになる言葉を出していたのですが、日本語では極力伏せています。3者が意外なつながり方をすることが最後にわかり、読者が驚き、楽しめるよう意識はしました。

◆高崎さんの解説に、作者のコロンバニの属する芸術分野に生きるフランスの女性たちは、イタリアの家父長主義や女性性の固定観念、カナダの弁護士サラが苦しむようなダブルスタンダードの男性的能力主義からも自由だと書かれていたのが印象的でした。ハフポストのインタビューにはそんな作者の自由な思想がよく表れていて興味深かったです。

▶▶作者の新作“*Les victorieuses*”（フランスで2019年5月発売）は、ついにフランスを舞台にしているようです。女性たちがさまざまな理由から集まってくる施設の話です。



著者の新作
“*Les victorieuses*”

◆作品はいつもどこで探していますか？ブックフェアなどですか？

▶▶作品は、さまざまな著作権エージェントから送られてくる情報を見て判断しています。社内には法兰克福やロンドンのブックフェアに行く者もいます。『三つ編み』はフランス語ですが、基本的に英語圏の作品を多く編集していますので、これからは英語以外のヨーロッパ言語の作品にも取り組んでいきたいと思っています。もちろん韓国や中国、台湾、あるいは他のアジアの作品にも興味があります。

◆翻訳志望者へ言いたいこと、アドバイスなどはありますか？

▶▶翻訳者になる道が険しいのは重々承知していますが、へこたれずに持ち込みをつづける、というのが一番の道なのかなと思います。私自身、そうやって企画を立て、編集をしています。Twitterで発言する編集者も多いですし、イベントなどで声をかけるのもいいかもしれません。一度断られたからといって諦めないほうがいい、とはよく言われますね。一人の編集者に断られた作品でも、別の編集者に持っていったら、出し

てもらえてベストセラーになった、なんてことも可能性としてはゼロではありません。この仕事は編集者と翻訳者の人と人のつながりで、成り立っているのだと思います。

◆今後の出版予定についてお聞かせください。

▶▶今年から来年にかけて児童書や絵本を出していきたいと思っています。それこそ『三つ編み』の児童書版のような、10代の子たちを励まし、勇気づけるような作品をもっと出していきたいです。



◆インタビューを終えて◆

私はフランスでなく、北欧の作品の翻訳者ですが、普段日本にヨーロッパの作品を紹介する時、ヨーロッパは進んでいるんだ、すごいんだと上から目線になっている気がして、罪悪感を覚えます。

世界の中心が欧米だという思い込みを乗り越えるような作品、どっちが上とかそういうことではなく、文化人類学的な視点も織り交ぜながら、習慣、風俗、文化、家族のあり方、

ものの考え方の違いを深く掘り下げた本、文化の違いを受け止めつつも、それを超えた共通の課題に向け連帯していけるような作品が『三つ編み』なのではないか、と感じました。異文化への敬意ある作者が書いた作品だからこそ、日本人の心にずっと入ってくるのではないかと感じました。

女の子をエンパワーするような作品を今後も出していきたいという窪木さん。翻訳家として自立を目指しアドバイスを求める私達に「できるだけ前向きな言葉をかけてあげたいなあ」とポジティブな言葉を一生懸命探しながら、励ましてくださる姿を拝見して、窪木さんが今回の『三つ編み』の編集者であることに妙に納得してしまいました。

蛇足かもしれませんが、インタビューをしたのは、文学フリマ終了後、会場のそばのカフェででした。

「どうして文学フリマを見にいらしたのですか？」と尋ねる私に、窪木さんは、こう答えました。

「こういう楽しいイベントに参加することで、文学が好きだという気持ちや初心を思い出せるからです」